

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 33



津島町 しらうお漁

特 交 流 集

『地域 新たな展開を求めて』

- もう一つの「あさくら」
- 交流のまち吉田
- 県境を越えたふるさと市の交流
- 農業農村の活性化
- 開智・開明の姉妹館交流

アングル

地域づくりのために.....農協中央会会長/寺井信隆..... 3

特 交 流 集

「地域 新たな展開を求めて」

もう一つの「あさくら」.....朝倉村/藤原秀樹..... 4
 交流のまち吉田.....吉田町/河野哲夫..... 6
 県境を越えたふるさと市の交流.....広見町/上甲忠徳..... 8
 農業農村の活性化.....城川町/菅原忠利.....10
 開智・開明の姉妹館交流.....宇和町/末光安雄.....12

論談 一まちづくり

過疎地域の再生について考える(Ⅲ).....松山大学経済学部長/村上克美.....14

レポート

地域づくり交流研修.....16

地域づくり研究会議から

92年次総会フォーラム.....19

地域づくりのペースを求めて(Ⅳ).....五十崎町/宮本俊一.....22

ふれあい広場

リレーでちよっとく(松山市、瀬戸町から).....24

元気印レポート(川内町、西条市から).....26

〈「滑川ためとも祭り」を終えて〉

〈山、土、水そして、人々のふれあいから創造される村おこし〉

お便りコーナー(宇和島市、五十崎町から).....30

〈「擬洋風建築」讃歌考〉

〈大きな榎の木の下で〉

Information

媛のくにフラッシュ.....32

(今治市、長浜町、野村町、肱川町)

今号のテーマ

特集「交流」

「地域 新たな展開を求めて」

今、地域活性化の手段として『交流』は重要なキーワードの一つとなっている。

四全総にも、東京一極集中から多極分散型国土の形成のため、地域間で相互に補充しあいながら交流していくことが謳われている。「定住」に加え、「交流」が入り、人と人のかかわり合いを問題にするようになってきたのである。

しかしながら、多くの町村では定住人口が減少し、過疎化に歯止めがかからないのが現状である。一方、人口にはもう一つ、そこを訪れる人の数、交流人口という考え方があ。定住人口を増やすことはできないが、交流人口はその地域の特色を活かして、他の地域の人々と交流を行うことによって、増やすことができる。交流人口を増やすことによって、その地域に活気がでてくるのは先進地といわれる地域で、すでに実証済みである。

この交流人口を増やし、地域の活性化や発展をめざすための一つの手段として、「地域間交流」や「国際交流」など様々な「交流」を位置づけることができると思う。

交流形態を大きく分類すると、サミットなどの地域と地域との交流、山村留学などの人と人との交流、そして今、多くの自治体を取り組んでいる国際交流が考えられる。

そこで、「舞たうん」では今号から「交流」をテーマに特集を組むことと致しました。その第一弾として今号は、「地域 新たな展開を求めて」と題し、地域間の交流を進めている五町村にご登場願いました。

表紙の言葉

春の訪れの早い南予も潮風は肌を刺す。そのなかで津島町岩松川河口は、しらうお漁で賑わっている。

透き通るアメ色の魚は、見た目にかわいらしいが、さて生きたままのおどり食いの挑戦には決心がいりました。のどをグイッと一気に。少々ためらっている間にしらうおは酢物になった。

柳原あや子





近ごろ「まちづく
り」「村おこし」「ふれあ
い」「生きがい」などの言葉
を随所で耳にする。

これらの言葉は、どれも相互に
関係があるようである。

日本の高度経済成長は、先端技
術の導入と共に、経済効率や合理
化の追求と生産性の向上を主眼に
進められてきた。そのことによっ
て、今や我が国は世界に冠たる経
済大国とまで評価されるに至った
のである。

しかし、その反面、情報・物・
人・金などが大都市へ集中し、そ
の弊害として、地方と中央の経済
格差が広がり、地域によっては過
疎の進行と共に窮地に立っている
ところも見られる。

また、昨今では、受験戦争や就

業形態に端を発した働き過ぎなど
の大きな社会問題も生じている。

このような人間社会の構造変化
は、「行きすぎ」から発生したもの
とも言われ、バランスを欠いたた
めの現象ではなからうか。

近年、日本は、経済的には豊か
になったが、人間生活においては、
他の先進諸国に比べて劣っている
とも言われる。

このような内外の指摘に対して、
我が国政府も経済重視から生活重
視への政策転換を行おうとしてい
る。

人間として豊かな生活を求める
には、経済的にも精神的にも豊か
でなければならぬ。仕事の充実
感や家族とのふれあい、地域での
交流を通じたバランスのとれた社
会的価値を創造しなければならぬ

と思う。

私は今、農協運動に携わる一人
として、地域におけるJA（農協）
の果たす役割を組合員や住民に訴
えながら、各種事業展開の中で、
快適な地域づくりを進めて参りた
いと考えている。

特に、高齢化が進む中、地理的
条件に恵まれない地域での健康問
題や「生きがい」づくり、「ふれあ
い」づくりを地域の方々と協同し
ながら、その克服への取り組みを
進めるとともに、「まちづくり」や

「村おこし」支援のため、貸農園や
観光農園などを通じて、非農家や
子供たちに農業を理解してもら
う努力を積み重ねている。そして、
自然や生命、食べ物を大切にす
る心と助け合いの精神を培いたい
と考えている。

ともあれ消費者や子供たちに農
業への理解を深めていくことが農
業生産に弾みをつけ、ひいては地
域の活性化に結びつくものと確信
している。

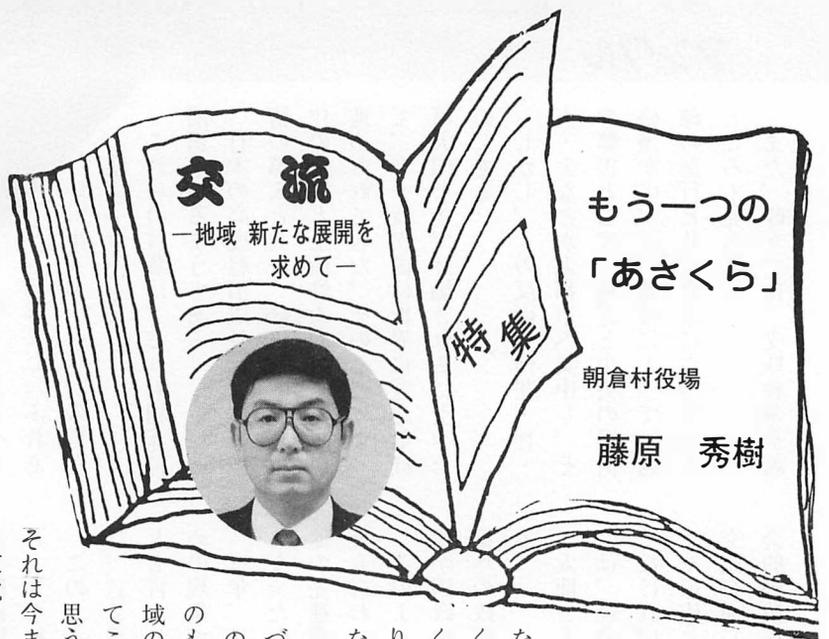
一方、農業者自らにも、消費者
の心を汲み取った生産活動に取り

組む姿が見られる。特に農業の国
際化の中にあつて、若者を中心と
した海外視察の成果として、他国
の農業事情やライフスタイルなど
を学び、それを自らの生産活動に
生かしているような事例、またパ
ソコン通信やファクシミリなどを利
用した情報網の拡大により、積極
的な生産活動を続けている事例な
ど、枚挙にいとまがない。

このように、JAはもとより農
家組合員においても、日常活動を
通じて時代に即した地域における
農業者・JAの役割発揮に努めて
いるところである。

今、通信技術や物流、交通網の
発達によって、地域活性化の障害
が逐次改善されたことから、まさ
にこれからが「まちづくり」「村おこ
し」の本格的な時代になるものとも
考える。

今後は従前の認識を一掃し、急
激な時代変化の中で、それぞれが
地域特性を生かしたまちづくりに、
こそ取り組むべき重要な局面
を迎えていると思う。



■はじめに

「地方の時代」が叫ばれて久しく、全国各地で「まちづくり」「むらおこし」の運動が盛んに行われているが、必ずしも全てが実を結んでいる状況ではない様に思われる。

今、朝倉村は今治市のベッドタ

ウンとして人口も増加しており、全体としてはまちづくりへの危機感は希薄な状況にある。

しかしまちづくりは、その地域の人々が考えなければだれも考えてはくれない。明日のまちづくりにつながる何かを掘り起こしていかなければならないと思う。

しかし、どの様なまちづくりにおいても内からの輝きがなければ一過性のものになってしまう。地域の人々がいきいきと輝いてこそ真のまちづくりだと思ふ。地域を輝かす原動力、それは今まで培ってきた村の生活・文化をもう一度学び直し、他の生活文化に接し、地域に根ざした新しい生活・文化を創造しようとするエネルギーであると思う。

この様なことから、他市町村との交流を深めようと、福岡県朝倉町との交流事業に取り組んだのである。

■交流のきっかけ

福岡県に朝倉町という町があることは、以前から知っていた。

しかし、朝倉町の様子を知るための資料に乏しく、また、物の豊かさを求める社会的背景のなか、文化等心の豊かさを求める気運は高まりつつあるものの、福岡県に同じ「朝倉」という町があるんだといった程度の認識しかなかった。

ところが、昭和六十年代に入ると、町村合併促進法により合併した町村が三十周年を迎えることとなり、各地で町(村)史(誌)の発刊が行われ、今まで外部へ向けられていた目が自分達のふるさとに向けられることとなった。

朝倉村においても、合併三十周年記念事業として、朝倉村誌を発刊した。この中に、「朝倉」の地名の由来の一説として斉明天皇にまつわる説があり、斉明天皇西征の時、百済救援のための大本営朝

倉橋(広庭宮)があった福岡県朝倉町がより身近な町と感じられる様になった。そこで、行政上の地名が全国に二つしかない朝倉町との交流を深め、お互いのふるさとを見つめ直すとともに、異なる気候・風土に培われた文化に接し、豊かな心を育み、活力あるまちづくりの原動力となる心豊かな人づくりを通じて、活力と潤いのある二十一世紀の「朝倉」づくりを目指すこととなった。

■事業の基本的コンセプト

魅力あるまちづくりの原動力は、「ふるさと愛」にあふれた人々の持つ人的エネルギーであり、そして「ふるさと愛」とは「朝倉」を愛する心であり、「朝倉」を誇りに思う心である。そこで、この「朝倉町」との交流事業を実施する事により、今一度、我がふるさと「朝倉村」を見つめ直し、それぞれの地域に根ざしたまちづくりの実態に触れ、お互いの交流を深めることで、朝倉村の持つポテンシャルを高め、住民自らが参加する新しい活力あるまちづくりへの基盤づ



くりを図ることとなった。さらに、当事業を契機として、今後より一層交流内容を充実させ、小学校の修学旅行を利用した相互交流、各種スポーツ交流、文化芸能交流等各界、各層を通じて人的交流と理解を深めていきたいと考えている。そして、できれば姉妹町村としての提携を期待するものである。

■相互交流へむけて

その町の様子を知り、理解を深めるには、その町の刊行物が一番良いと考え、双方の資料交換を行った。

また、その際朝倉町からの提案で、双方の「広報あさくら」の交換を始めるとともに相互記事の掲載を行う等、相互理解のための基礎資料の収集に努めた。

次に、朝倉町の各種資料により、「朝倉町を理解する勉強会」（朝倉村活性化協議会）を発足させ、行政と住民が一体となって、村の活性化に取り組んだ。

■事業の経過

①「朝倉町」訪問交流事業

「朝倉町」のまちづくりの視察



文化祭で朝倉町紹介

型になりがちであるため、今後は住民の自立的な交流活動や、行政と住民が一体となった息の長い交流を深めていくこと。また、草の根活動を進めていくことがこれらの課題である。

■今後の展望

本州四国連絡道路と四国縦貫自動車道を結ぶ今治小松自動車道建設へ向けて、高速道路については先進地である朝倉町から指導や情報交換をお願いしていきたいと考えている。

また、朝倉村が建設予定の「ふるさと交流物産館」の中に、朝倉町の特産品売り場を計画。人の交流だけでなく、特産品の交流についても検討し、活性化を図ってきたいと考えている。

なお、平成三年三月には朝倉町

や研修交流会の実施及びイベント交流の実施（産業文化祭等のイベントにおける特産品即売等）、さらに交流事業補助要綱を制定し、活動の活性化を図った。

②「朝倉村」紹介事業

前記訪問交流事業にあわせ、朝倉村の概要・特産品を紹介するパンフレットを作成し、「朝倉町」の窓口での配布を依頼するなど、「朝倉村」の紹介・PRに努め、円滑な交流事業の推進を図るとともに、昭和六十三年七月から定期刊行物（広報紙）への相互記事の掲載を行い、相互の活性化を図った。

■問題点と課題

地理的条件により、どうしても経済的制約を受け、経費の面において負担がかかる。

現状では、どうしても行政主導

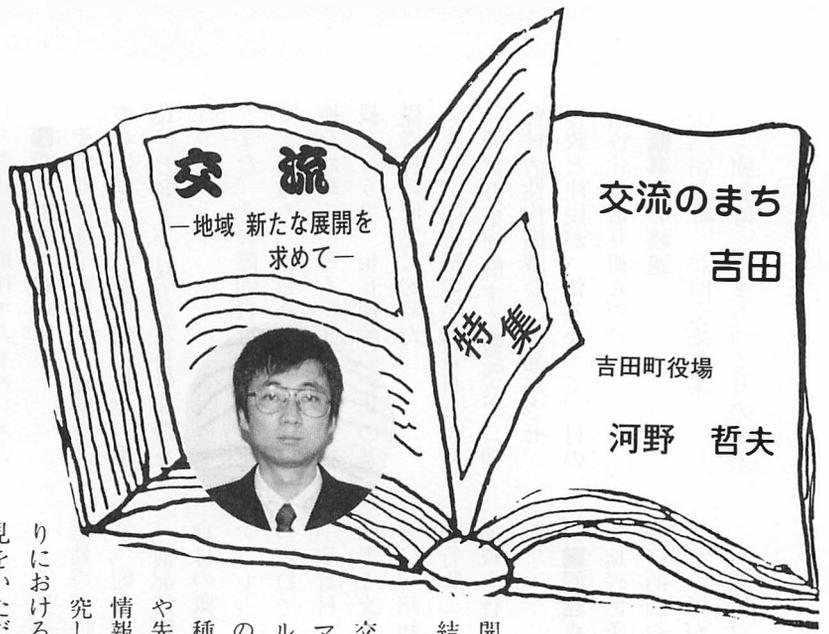


朝倉町の三連水車



若者塾生の朝倉町訪問

から交流のシンボルとして友情の証にと、「三連水車（うち一基が「緑のふるさと公園」に据え付けられた。現在、朝倉町のメイン施設に、朝倉村から何か村のシンボリックな物の寄贈をと、検討中である。



■全国吉田町「五町」交流

二十一世紀に向けてのまちづくりをどう展開していくか。町行政のみならず町民の関心が最も大きいこのテーマに向けて、昭和六十二年度から地域間交流によるまちづくりの構想・理念づくりがスタートしました。そして、翌六十

三年度から啓蒙普及に努め、平成元年十月十五日には、二年間の準備期間を経て、当吉田町において五町による全国吉田町末来会議が開催され、姉妹縁組が締結されました。

この間、『なぜ地域間交流なのか』を研究テーマとして、まちづくりグループが中心となって町の現状把握に始まり、各種シンポジウムへの参加や先進地研修等を実施し、情報とその効果・展開を研究していただき、まちづく

りにおける交流の位置付け及び意見をいただきました。これを受けて、全国レベルでの人的・まちづくり資源、情報のネットワークの構築や人づくり、地域文化の再認識と活用、地場産業の振興等、まちづくりの礎となる様々な期待と可能性を内包する交流のコンセプトを形成しました。

昭和六十三年度からまちづくり

グループのメンバーによる交流使節団（若者を中心とした男女のグループ三十名）を結成し、啓蒙と実践に着手するため、全国の吉田町へ出向いていただきました。

姉妹縁組の目的は、『同名の縁で結ばれた絆を糧として、産業・教育・文化における相互交流により友好と親善を深め、生活文化の向上を図る』ことにあります。この目的に従い、縁組後三年間には様々な交流がありました。全て『人』を基本とした交流方針に基づいています。

■特色ある交流の実践

小中学生による四泊五日のホームステイ。

これは、鹿児島県吉田町と当吉田町の教育委員会が企画、実践して毎年交互に十名の小中学生を派遣・受入れしているものです。

ホームステイの経験の無い一般家庭から希望を募り、草の根的な交流を実践し、町を形成する単位の家が、子供を絆として新たな交流の展開を図っていくものです。

このことから、子供のみならず大

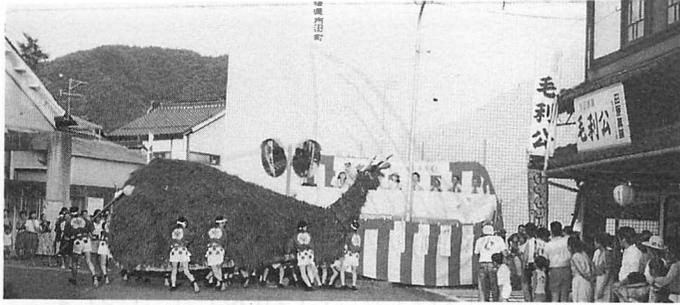
人たちも興味深い経験と知識の集積等から新しい自己の可能性等を発見し、人づくりの点についても効果が上がっています。

女性のまちづくりへの参加意識もこの交流で加速しました。

各町の女性組織間で情報を交換しながら、まちづくりにおける女性の役割の研究が始まりました。それぞれの町における女性の位置付けから、ゴミ問題や福祉問題等の幅広い活動内容を共同で収集分析して新しい研修を始めます。とうとう昨年の夏には、女性組織が行政を動かす、全国吉田町の女性を当町に呼んで、女性だけで企画実践するシンポジウムを開催しました。このことで、当町の九つの女性団体延べ五千人が一つにまとまり（他の四町も刺激され、新



小中学生ホームステイ(鹿児島県吉田町にて)



しい女性活動を展開)『未来を創るのは女性だ』と、全国吉田町のまちづくりへの提言をしました。この時、全国吉田町女性憲章も制定し、そのパワーに町が震えました。

祭り文化の交流として、当町の牛鬼を広島県吉田町へ派遣。牛鬼の担い手は、当町の経験豊かな地区住民から四十名を募り、町の中心街と夏祭会場に暴れ込み、町民の度胆を抜く痛快さと伝統文化の重みを数千人の参加者に認識させることができました。また、伝統文化の継承を町ぐるみで取り組んでいる広島県吉田町の子供神楽がやって来て、伝統を支える住民意識の大切さを五百名の参加者の感性に訴えもしました。

新潟県吉田町の若者共和国が、七

千万円の予算の一部を使って、吉田拓郎に制作依頼した『吉田町の唄』が、全国発売され、ヒットしました。この唄が、今や全国吉田町のテーマソングになっています。

埼玉県吉田町と新潟県吉田町では、毎年、中学生によるスポーツ交流を実施。さらに、二百四十キロの区間をマラソン同好会員二十名が二日間かけて走り抜いたり、当町出身で、新体操のソウルオリンピック選手大塚裕子さんを招いての新体操教室を開催したりしています。

交流によってできたネットワークを利用して、ミカンや特産品の宅急便の取扱いを全国の吉田町に広げたり、当町の特産品を利用して新潟県吉田町のお菓子屋さんが、新しい菓子を開発中だとか、年を追うごとに交流がまちづくりの豊富な資源を産み出しています。最近では、プロサッカーリーグのサンフレッチェ広島FCのユースチームが、今年の四月から広島県吉田町で練習することが決定した情報もあり、自分たちの町に無

い『まちづくり資源』を、相互の町の協力によって効果的に活用できるネットワークづくりが、今後の交流の新たな展開を可能にすることと思います。

■フルーツサミット

フルーツサミットはフルーツ生産量日本一の八町村の指導者たちによって、「フルーツに共通する問題点の解決に向けて、フルーツ



ふるさとづくりにあります。

フルーツで夢多い二十一世紀をめざす『第六回フルーツサミット』は『ふるさとをもっと素敵にするフルーツたち』をキャッチフレーズに、長野県松川町で開催されました。このサミットでは、各町村の指導者たちによって、フルーツの高公益性、付加価値の開発や観光事業、消費者開拓、海外進出等の効果・問題点等を研究しています。今回は、特に農業女性による意見発表を取り入れ、生産農家からの現状と課題を研究し、それぞれの産地づくりやまちづくりの方向を探りました。

八つのフルーツが語る歴史や経済・世界情勢等が、この交流を通じて知的な、そして情報のネットワークを構築していきます。まちづくりにおけるその意義は、益々高くなっていくものと考えています。

産業の活性化を図り、豊かなふるさとづくりを推進する」ことを目的に、昭和六十二年七月、山梨県一宮町から始まりました。このサミットの視点は、将来を展望したフルーツ産業の活性化と拓けゆく



商店街中心部の公共

敷二十人。組合員

■**広見町近永日曜日**
昭和五十八年八月、町の中心である近永商店街の活性化と、商農提携による地域振興を図るため開設。組合員



広見町商工会
事務局長
上甲 忠徳

中村組合長以下組合員が互いに協調、融和して土曜市の発

柄を表わしている。

など独自の催しと「南国市商工まつり」への参加である。なお、出店の三分の一が植木の店というのも植木の生産地という土地柄を表わしている。

週土曜日に開設している。土曜市の最大の特徴は、春の「さつき祭り」、秋の「〇周年感謝祭」

元商店街の振興を図るため開設。組合員数五十人。毎

国市制十周年を記念し、地

■**南国市土曜日**

から二千人の人出で賑わっている。

駐車場を利用し、毎月第三日曜日に開いています。参加店は小売店、木工業者、生活改善グループ、福祉施設などで、季節によって餅まき、チャリティー掘り出し市、クイズや福引大会などカラフルな運営で好評を得ており、毎回千人から二千人の人出で賑わっている。

展と南国市勢の進展に尽力して今日に至っている。

組合長の中村朋子さんは「土曜市のねえさん」として有名であり、組合員の信望も厚く、リーダーとして抜群の統率力を発揮している。

■**姉妹提携の契機**
姉妹提携のきっかけは、昭和五十九年二月、広見町近永日曜市のメンバーが、日曜市の活性化を目指して、高知県南国市の土曜市を視察研修したことに始まる。

その際、中村土曜市組合長をはじめ役員との意見交換が行われた中で、高知市の日曜日とは一味違ったところがあること、組合員の信頼の厚い女性組合長のもとで

■**姉妹提携宣言式**
お互いの心と心が交流し合って、

その後、双方で検討を重ねた結果、南国市土曜日としても広見町近永日曜日と提携することが、双方の発展に寄与するものとの認識に至り、九月の近永日曜日に友好出店を行い宣言式を行う運びとなったのである。

見事な運営がなされていること、また、将来近永日曜日活性化のためには、この明るく闊達で、しかも伝統ある南国市土曜市の協力を得ることが、近永日曜市のより一層の発展の転機となるものであることなどの思いを強くしたことから、ぜひ胸を貸して欲しい旨の申入れを行った。

その後、双方で検討を重ねた結果、南国市土曜日としても広見町近永日曜日と提携することが、双方の発展に寄与するものとの認識に至り、九月の近永日曜日に友好出店を行い宣言式を行う運びとなったのである。

見事な運営がなされていること、また、将来近永日曜日活性化のためには、この明るく闊達で、しかも伝統ある南国市土曜市の協力を得ることが、近永日曜市のより一層の発展の転機となるものであることなどの思いを強くしたことから、ぜひ胸を貸して欲しい旨の申入れを行った。



南国市土曜日

姉妹提携宣言書

高知県南国市と 愛媛県広見町
土曜日と 近永日曜日

は、相互の理解と信頼を基に、双方が行っている土曜日あるいは日曜市の分野で交流を図り友好を深めることが双方の住民福祉の向上はもとより商業者と農産物生産者等との生々発展に寄与するところ大であることを確信し、ここに姉妹提携を結ぶことを宣言する。

昭和59年9月16日

高知県南国市土曜日組合
理事長 中村 朋子
愛媛県広見町近永日曜日実行委員会
会長 毛利 範 男



姉妹提携宣言式



昭和五十九年九月十六日の近永日曜市では、南国市からは市長の代理として吉本助役が、また商工会からは吉村会長、土曜市からは中村組合長ほか役員多数の出席のもと、双方の行政、商工会、^{いち}市関係者が出席して厳粛な中で宣言式が行われた。

これによって今後年二〜三回程度相互に友好出店を行い、それぞれの特産品の販売を行いながら、益々の友好関係を深めることとなった。

■その後の交流と成果

この^{いち}市の提携により、近永日曜市に対する消費者の評価も高まり、一段と活況を呈するようになった。一方、南国市においてもこの提携を機に行政の対応も一層濃密なものとなり、

南国市
土曜市
の活性
化に寄

与できたとのことで、提携を持ちかけた近永日曜市側としても面目を施したところである。

姉妹提携以来、年間二〜三回の割合で双方が出店し合い、相互に特産品を販売している。

とりわけ、例年八月の近永日曜市には、南国市から行政や商工会も含めて大勢の方が来町され、出店を行うとともに、夜は奈良川河畔で、広見名物の「いもたき」を囲み、時には高知のヨサコイ踊りや広見音頭が出るなど賑やかな交流が行われている。

また昨年十月の「南国市商工まつり」には、広見町からも町長、商工会長をはじめ大勢が参加し、出店を行うとともに、餅まきやカラオケ大会に出場するなど、県境を越えた物心両面にわたる友好関係が続いており、現在では行政レベルの交流へと発展している。

■これからの課題

物事は何にしてもマンネリが一番の禁物、現代は特にその感が強い。

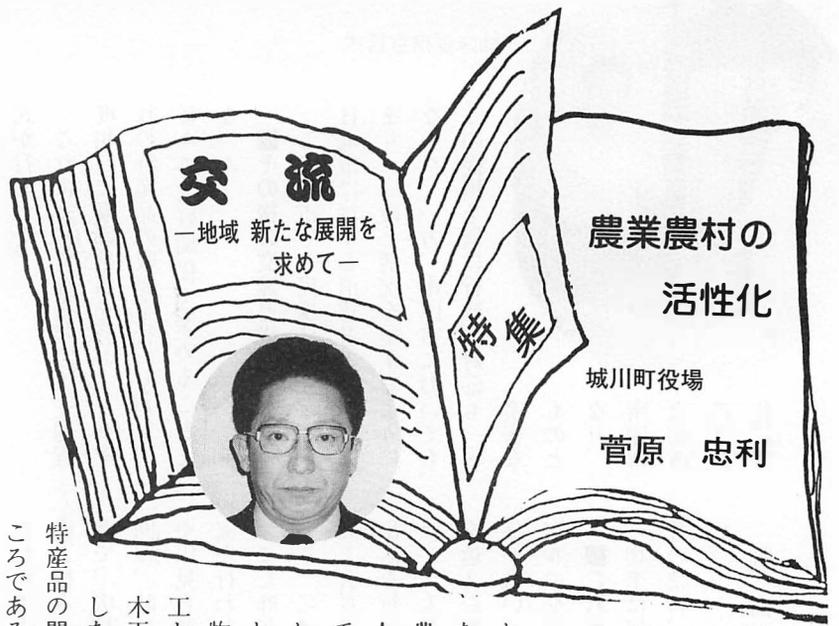
町、商工会、^{いち}市関係者一休

となつて取り組んで来た近永日曜市も、開設以来十周年を迎え全く問題がない訳ではない。開設当時と異なり、今では近隣市町村のほとんどで同様な催しが行われており、安易な前例踏襲では顧客や出店者の減少を招き、衰退していく懸念は十分にある。

これからも南国市ともども、絶えず新しいことに挑戦しながら、消費者から愛され親しまれる^{いち}市づくりに取り組んで、^{いち}市の発展を通じて、ふるさとづくりに貢献していきたいと考えている。



南国市の人達と踊りで交流



農業農村の 活性化

城川町役場

菅原 忠利

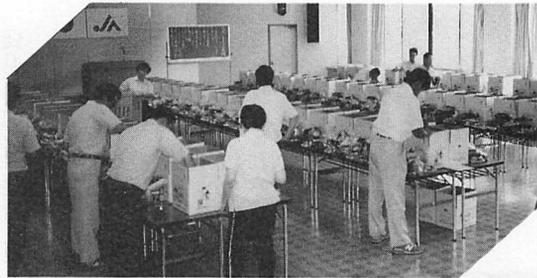
■はじめに

農業環境がだんだんと厳しくなるに従い、農業形態も低コスト大量生産型と少量多品目型のものに大別されるようになってきた。低コスト大量生産型はさておくとし、少量多品目型は、それぞれの農家の能力に応じて作れるものを

作るというもので、その生産物もいたって不揃いであったりして市場への出荷は難しいものである。なんとか付加価値を付けることによって農家の活性化につながればという思いから、農産加工を奨励し、有人・無人の売店を設置して、農産品やそれを加工した製品などの出品を促してきた。町自らも農産物加工センター、食肉加工センター、無菌培養施設、木工加工所、炭窯等を整備しながら加工事業を推進し、特産品の開発製造に努めてきたところである。

一方、町民の方の中にも、グループや個人で加工活動をする人達が増え、古来から引き継がれてきた郷土料理や加工品に加えて、新しく開発した加工品等製品も沢山出来るようになってきた。これは農家が生産するこの多品目の原料が功を奏し、各種の製品開発に

つながったものであり、このことが、高齢化が進む農家への励みにもなっているものと確信している。次なる課題は、これらを如何にして販売するかということである。物が満たされた現在、消費者ニーズを十分に



研究し、品質の良いもの、必要としているもの、満足感を与えられるもの等の製品であるかどうかということが重要である。

ある。併せて、産地である城川町が、消費者の皆さんの感性に訴えるまちづくりをしているかどうか重要なことであると考えられる。このような経過を経て、奥伊予ふるさと宅配事業、アンテナショップが誕生することとなった。

■奥伊予ふるさと宅配

昭和五十九年十月に、城川町からおこし実行委員会が、城川町産品の販路拡大の一貫として始めたものであるが、都市と農村の交流という面からも大変有意義な事業となっている。この宅配は、城川で生産されたものを、五月・七月・十月及び十二月の年四回、会員の皆さんに郵便小包でお届けする事業である。小包には、新鮮な季節の香りと共に、町の広報紙、町農協の広報紙などのふるさと情報を出来るだけ多く添えることにしている。会員は、年間会員と季節会員があり、年間会員の会費は二万円、季節会員はその都度一個五千円で申込みを受けている。平成四年の発送個数は二千二百個、その内、年間会員分が五百個である。年間会員には、町施設の利用料や町直営の製品価格の割引の特典がある。年間の売上高は一千万円余である。今後は年間会員の拡大を図ることが重要で、いずれは一億円産業に発展させることを目標としている。

ふるさと宅配の主なメニューは、五月が、新茶、きやらぶき、タケノコ、乾ゼンマイ、干大根、カキモチ。七月には、スイートコーン、ゆず、スモモ、梅干、梅ジャム、手作りしょう油。また十月は、さつまいも、漬けもの、栗、みそ、トマト、ゆず饅頭。そして十二月には、しめ飾り、鏡餅、草餅、白餅、干柿、椎茸、木製カレンダー、こんにゃく、柚子酢といったもので、これらを広く町内から偏らないように仕入れて詰合わせている。その際、メニューがマンネリにならないよう、また、製品の質の向上に努めるとともに会員との信頼関係を深める工夫が大変重要なことと考えている。

■アンテナショップ

八幡浜市新町に「ふるさと店しろうかわ」を開店したのは、平成元年十二月である。愛媛県が主催する南予地区県産品まつりに参加したことがきっかけとなり、八幡浜市商店街が毎月実施している八幡浜の「八」をとった、八日市に招かれたことから始まったものであ

る。その八日市で城川町に割り当てられた場所が今の「ふるさと店しろうかわ」の軒先であったことも嬉しい。毎月、八日市に参加す



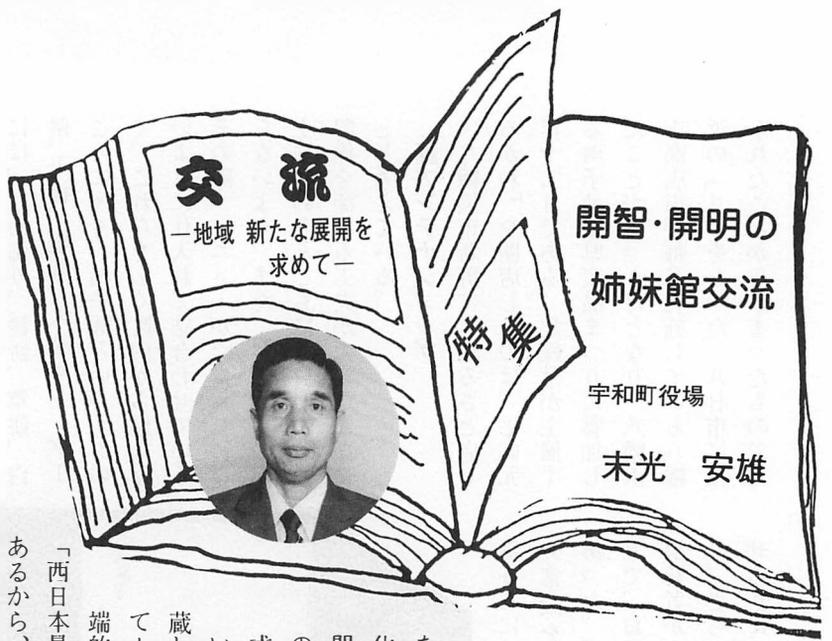
るうちに、お得意さんも次第に増え常設を勧められるお客さんも随分あった。丁度その頃、販売活動の上で、お客さんのニーズを把握し、消費者が求め、満足する製品づくり、さらには販売をいかに促進させるかについて検討に入っていた

時でもあつて、アンテナショップの実現となった。間口四・五メートル、奥行き六メートルの小さな店だが、お客さんのニーズや商品に対する反応が直接分かり、一方で、販売増進と城川町のPRに大きく役立っている。しかしながら、商圏が小さいので大きな売上げは望めない、幅広いニーズが得られない、毎日の商品搬送など店の規模に対してコストがかかり過ぎることがネックとなっている。これらを考える、いずれ、少なくとも二十万人以上の都市への進出を図らなければならぬと思うのである。平成四年度の売上げ額は約二千五百万円と目論んでいるが、この店の経営を通じて得るものは大きいものがある。



城川の歳時記

- | | | | |
|---------|-------------------------------|------------|-----------------------|
| 1月14日 | どんと焼き (魚成・今田ほか) | 8月6日 | 川津南楽念仏 |
| 旧1月16日 | 古市・お不動尊 | 8月14・15日 | 盆踊り花火大会 |
| 4月8日 | 魚成・竜沢寺花祭り | 8月21日 | 花取り踊り (F相・八幡神社) |
| 4月17日 | 窪野・三滝神社春祭り
(國邊杖無形文化財八つ鹿踊り) | 10月10日 | 城川オリンピック |
| 6月下旬 | 魚成・実盛送り | 10月25日 | 遊子谷秋祭り (県指定無形文化財七鹿踊り) |
| 7月第1日曜日 | どろんこ祭り (土居・三嶋神社) | 11月3日 | 町内秋祭り |
| | | 11月第3土・日曜日 | 城川町産業文化祭 |



■縁結びへの鼓動

あれは、開智・開明の姉妹館提携がなされた年の前年か又は前々年のことであつたらうか。当時、宇和町議会議員をされていた保木泰広氏から「開智・開明の提携を結んではいかがだろうか」との提案があつた。当時、社会教育課長



宇和町での旧開智学校特別資料展

をしていた私も、宇和文化の里の核となつている開明学校は、学校としての由緒もあり、建物の様式においても、珍しく古いものであり、また、所蔵している教育資料においても、「宇和町かるた」が端的に表現しているように「西日本最古を誇る開明学校」であるから、宇和の文化をより高めるために、東の代表開智学校と提携を結ばせていただくことは、大変良いことだと思つていた。

しかし、先方の松本市は人口規模では、宇和町の十倍の二十万人、建物の文化的価値においては、開智学校は国の重要文化財、開明学校は愛媛県指定の文化財と格差

があり、所蔵する教育資料の数においても開智学校は約六万五千点、開明学校は約五千点と大きな差があるなど、弱小の宇和町として縁組みの申し出をすることには、多少躊躇する面があつた。し

かし、私は町長、教育長等の許可を得て、松本市の佐藤玲子博物館長（開智学校を含む博物館すべてを掌握する館長）と電話で交渉をもたせていただくこととした。長年この仕事に精通されている佐藤館長は、館活動の実績を挙げてい

■信州の地で調印式

る方であつたが、自治体間の組織提携とあつて、単なる資料等の情報交換では済まされず、佐藤館長の来町視察、両市町教育委員会の承認、両市町議会での提携議決などを経て提携へと進んでいった。

「人口の大小、建物の文化的格付や資料数の差などで、姉妹館提携が云々されるものではない。その地で教学の道を拓いていこうとした先人の尊い心と、資産を残

して行こうとする共通の精神こそが大切だ」とご理解をいただいた和合松本市長さんを始め、松本市教育委員会のご英断で、松本市制八十周年を迎えられた記念の節目の年である昭和六十二年十月六日に、宇和町から宇都宮町長、佐々木町議会議長、竹内教育委員長等八名が参加、開智学校二階ホールで、和合松本市長ほか関係者多数出席のもと、両市町長の手で調印が行われた。提携書の内容は、「両校はともに近代教育の発祥を記念してその歴史と伝統を伝える教育資料を保存公開し、教育文化の発展に寄与している。両校は今後相互協力し、博物館活動を通して一層の友好と教育文化の振興に努める」としている。

教育・文化という面でお互いに誇りを持ち、そのことを柱にまちづくりをしている両市町にとって、この姉妹館提携を結ぶことができたことは、後世にまで銘記される記念すべき事柄である。

調印式に参加した一同がその後共に語り合ったことは、「これを



宇和中生の修学旅行〔開智・開明〕姉妹館表敬訪問記念
S63. 4. 26 於 旧開智学校

単なる形式としての提携とせず、今後いろいろな分野で交流し合い、目的達成のために尽くすことが大切である」ということであった。

■提携後の活動

宇和町においては、その後、次の時代を背負ってくれる中学生達に「開明の心」を知ってもらおう一

案内を受ける行事を毎年実施している。その他下記のような行政職員等による視察研修、資料貸与による特別展などが双方で実施されているが、民間人による交流などが昭和六十三年の宇和郷土文化保存会の人びとの訪問以外に目立ったものがないのは淋しい。

助として、修学旅行(二年生全員)

に開智学校を訪れる日程を組み、松本市教育委員会関係者の温かい

■今後の課題

中部地方と四国の西南という遠距離のために、年間を通じ頻繁に

旧開智学校・旧開明学校姉妹館提携後の主な活動記録

- 昭和63年～
毎年宇和中修学旅行生が松本市訪問。
- 昭和63年～平成元年
宇和町職員研修で各班毎に松本市訪問。
- 昭和62年11月17日
松本市収入役、教育長等6名来町 宇和町での提携祝賀会を行う。
- 昭和63年9月20日～22日
宇和町教育委員 松本市施設視察
- 昭和63年10月3日
社団法人宇和郷土文化保存会と宇和地区公民館、旧開智学校訪問研修(10月2日～6日)で松本市を訪問。43名参加
- 平成元年1月27日～28日
松本市教育委員・博物館職員一行来町
- 平成元年6月6日
荒井博物館長・窪田学芸員 特別展開帳で来町
- 平成元年8月2日～3日
松本市議会教育民生委員会、行政視察で来町(議員9名、大友博幸助役ら理事者7名、事務局2名の計18名)
- 平成元年11月17日～18日
松本市教育委員 3名来町
- 平成2年8月4日～9月9日
松本市の日本民族資料館で開催された特別展「教育の文化誌展」の展示資料として、開明学校の教育資料(掛け図、ほか)14点を松本市へ貸し出し。
- 同年8月3日～4日
上記の「教育の文化誌展」に関連して、宇都宮町長、松浦教育長ら計4名が松本市を訪問。
- 平成3年9月26日～27日
旧宇和町小学校移築・米博物館完成祝賀会(9月27日)に出席のため松本市から大池光教育次長、半崎弘市立博物館長の2名来町。
- 同年9月27日～11月10日
旧開智学校から教育資料(鉛筆画、淡彩画、信濃教育会編の教科書類、ほか)53点を借りて、米博物館を会場に「重要文化財松本市旧開智学校特別展示」を実施。なお、これは第17回町産業文化祭(11月2日～4日)の主要行事の一つとしても取り扱う。
- 同年11月21日
松本市議会から行政視察のため来町(新風会。議員5名、随行1名)
- 平成4年10月5日
町教育委員会の研修(10月4日～8日)で、竹内教育委員長、松浦教育長ら計7名、松本市表敬訪問(松本市の新市長・有賀正氏、新教育長・宇原立秋氏らと会議。)

交流事業を組むことは困難であろう。しかし前述したように、もつ

と民間人の交流などを積極的に進めたいものである。例えば信州旅行のツアーを計画するとか、松本

市においてもお四国巡り等のプランを立てていただいてはどうだろうか。その他比較的経費のかからない事業として民族資料の交換展示、民間人による文通、創作作品の相互展示等も提携の活動の輪を広げることになると思われる。

松本市関係者からお聞きしたことであるが、「松本市は施設の管理を市が直接行っているので、宇和町の郷土文化保存会のような民間後援団体的な組織はない。自分たちの町の宝として意識を持っておられることは羨しい」ということであった。

両市町の民間団体でも文化財保護などについて、積極的に語り合う場なども欲しいものである。

過疎地域の再生について考える(Ⅲ)

— 新たな過疎対策の方向 —

松山大学経済学部長 村上 克美

人口の自然減、若者の都市部への流出持続、人口・就業者の高齢化加速、新規卒就農者の減少、農家数の減少、耕作放棄地の拡大、荒れた山林の増加、集落規模の縮小、地域活力の低下。このような用語は最新の農業白書や林業白書においても、過疎地域の現状を如実に示すキーワードとして、しばしば用いられる。また、「適正な森林管理を推進する上で、少なからぬ影響が心配される」(「林業白書」一九九一年度)、「農業生産を支える基盤のぜい弱化が急テンポで進行している」(「地域」)は農業集落の存続自体が困難となっている(「農業白書」一九九一年度)等と指摘されるように、過疎の農山村はある意味で、危機的といわねばならない。

ところで過疎町村はふるさと創生資金等を用いて、各種イベントの開催、地域特産品の開発、物産館、歴史資料館、美術館など観光拠点の整備、地場産業の活性化等に多様な事業を展開している。地域アイデンティティの創造と関連させて進めている町村も少なくない。また、近年、結婚祝金、出産祝金、新規就労者報償金、新婚住宅の建設、住宅用地購入費の助成、家賃の補助など人口増加や若年者の定住促進を目指す制度の創設も目立つ。愛媛県内でも、「別子山村振興対策褒賞条例」、「新宮村定住化推進に関する条例」、「上浦町若者定住促進対策条例」、「肱川町定住促進対策条例」などかなり多くの町村で導入された。このような努力にもかかわらず人口減や高

齢化に歯止めがなかった町村は極めて稀である。一九八五～九〇年の人口増減率をみると、県内過疎町村で増加したのは新宮村(増加率一・九%)、魚島村(同一・二%)、内海村(増加数一人)の三村のみであることがわかる。他の町村はすべて減少であり、減少率が一〇%を超える町村も十一を数える。増加の理由は高速道路建設に伴う工事関係者の転入(新宮村)、下水道工事のための関係者の転入(魚島村)と言われており、人口減が抑制されたわけではない。

いずれにせよ、市町村への財政補助と過疎債を中心とする過疎対策は従来と同様に間接的すぎて十分な成果を期待しにくい。現在の過疎に対決するには、過疎問題について発想の大転換が必要であろう。すなわち、過疎の農山村やその集落は、その地域住民のみならず都市の住民や消費者のいのちとくらしを守るために「かけがえない」役割を担っている。したがって、農山村の過疎化は「住み慣れた故郷に対する個人的な感傷や個々の地域住民の私的な利害を超えた」(七戸長生・永田恵十郎編「地域資源の国民的利用」一九八八年、農山漁村文化協会) いわば国家的、国民経済的問題である。しかも、この問題が過疎町村やその住民の努力のみでは解決しえないほど複雑化しており、当然に中央政府も過疎地域の再生を国家的課題と位置づけて、思い切った対策に着手すること、都市部やその住民も過疎町村やその住民などと同レベルで問題に関心を持ち、責任を分担することが期待されている。

こうしたなかで、近年注目されているのがイギリスの丘陵地農業対策に起源をもつECの「条件不利地域対策」(一九七五年に導入)である。この対策は平地部に比して、気候、土壌、人口密度、経営状態など自然的、社会的、経済的条件の悪い地域の農業に国レベル(連邦、州など)で助成して、そ

の地域の農業所得の改善、最低限の人口密度の維持、自然景観の保全を図るものとされる。EC基準では「条件不利地域」は、①山岳地域（その高度のために並外れて悪い気候状態を有する地域等）、

②条件不利農業地域（…収益のあまりよくない土地で、かつ平均以下の経営状態にあり、人口密度が低い地域）、③小地域（観光のための景観維持あるいは沿岸保全に農業が必要とされる地域）からなっている（農村開発企業委員会「ドイツ連邦共和国の条件不利地域対策」所収の村田論文、中村論文『農村工学研究』四十九号、一九九一年など）。地域への助成制度は「個別経営投資助成」（農場の近代化等のための投資助成を一般より有利にする）、「平衡給付金」（自然上の不利を補償するための直接的な所得補助、三割以上を経営することなどの条件がある）の二つから構成される。

ドイツでも有数の条件不利地域とされるバーデン・ビュルテンベルク州の事例について若干紹介しよう（村田武「ドイツ山村の農家と所得補助政策」『科学と思想』八十五号、一九九二年）。この州の条件不利地域は市町村単位ではなく、肥沃度や経済的条件を考慮した農地評価指数（最良・百）を基準に①山地（指数十二以下）、②小地域等（十六以下）、③条件不利農業地区（二十八以下）に区分され、大家畜一単位（成牛一頭）ないし農地一畝に対して①二百八十六マルク（EC限度額）、②二百四十マルク、③七十一二百四十九マルクの平衡給付金が支給される（財源はEC二五％、国四五％、州三〇％負担）。例えば山地の平衡給付金（二百八十六マルク）はどの程度の所得補助であろうか。村田教授の調査では、「収益性の最も劣る経営の一畝当りの純益にほぼ匹敵する水準」とされ、所得補助としてはかなりのものである。さらに同州では、一九九一年に定住促進と景観保全を目的とした

「緑地計画」を策定し、「条件不利地域対策」平衡給付金のEC限度額を超える追加助成金を別枠で支給している（農地の七五％以上が草地である地域に対して傾斜度に応じて一畝当り六十―百八十八マルクを追加助成）。

なおドイツ（旧西ドイツ）全体（一九八八年）についてみると、農地面積では約五〇％が条件不利地域の指定を受け、農家戸数の約二五％が平衡給付金を受給しているといわれる。いずれにせよ、EC諸国においても、農業をめぐる環境は激変しており、「条件不利地域対策」にも若干の問題点はある（同一地域内での所得格差の拡大など）。とはいえ、「農村的自然環境、自然・国土保全などの視点が貫かれ、農業がもつ公益的機能を重視する姿勢がみられる」（七戸長生・永田恵十郎編、前掲書）といわれるように、わが国の過疎対策と異なり、この対策では、国民経済のなかでの農林業や農山村の位置、役割などが明らかにされている。また、ECの対策は個別

経営（農家）に対する直接的な所得補助という手法をとっているのが特徴的である。ちなみにわが国では、市町村への財政補助が中心で、過疎に苦しむ農家等に対しては、間接的な手段でしかないのである。こうして、一段と矛盾が複合化しつつある過疎地域を再生するためには従来の過疎対策とは異なる新たな対策が必要であり、「条件不利地域対策」とほぼ同様な理念をもつ施策はその候補の第一となるろう。

さらに、多様な公益的機能を生み出している過疎地域の再生が国民的課題であることから、過疎の市町村やその住民は自らの地域に愛情と誇りをもち、意識を高揚することが第一である。価値観が著しく多様化した現代は住民の多くがいきがいをもち、自己の実現を図る個性的な生活がより受け入れられる時代であれば尚更であろう。地域再生の活動に積極的に参加したり、自ら活動を創造したりする住民が増えることが要請されるのである。

第7回地域づくり交流研修記

～情熱を胸に、
地域を見つめて～

研究員
藤原 元久



地域おこしへの

情熱・自己の意識おこしを胸に県内から集まった十七名の元気人たち、去る十一月二十三日～二十七日の五日間、長野県の南木曾町（妻籠宿、浪合村、小布施町）を訪れ、个性的でバイタリティー溢れる方々に出会い、交流を行いました。ここにその研修の模様を報告します。

◇中山道「妻籠宿」

長野県南木曾町の妻籠は、



風景

木曾谷の南端に位置し、周囲を千メートル以上の山々に囲まれた、南北に六キロメートルの細長い山峡の村である。

江戸期、中山道の宿場町として、また、飯田への追分として栄え発展した。しかし、中央本線と国道十九号線が木曾川に沿って走るようになると、交通の幹線動脈からはずれることとなり、妻籠宿は次第にさびれていったという。

昭和四十三年から四十五年にかけて、「長野県明治百年記念事業」の一つとして、寺下地区の地域ぐるみの修復、保存が行われたのがきっかけとなって本格的な町並み保存運動が始まった。中山道の宿場町をそのまま保存し、観光地として「売らない 貸さない 壊さない」という三原則を盛り込んだ住民憲章の宣言とこれを守る住民の団結により、まちづくりが進め

られてきた。

◇妻籠を愛する人たち

まるで映画のオーブンスセットかと思うほどの、郷愁を誘う町並みが見事に残されているこのまちで、「財団法人妻籠を愛する会」常任理事の小林俊彦さんと常務理事の小笠原宏さんにお会いし、妻籠宿保存への思い入れなどについてお話を伺った。

小林さんは、妻籠宿の町並み保存に最初から携わっている相当な熱血漢で、妻籠の出身ではないが、妻籠の自然や歴史に魅せられ、この場所に落ち着いたのだという。小笠原さんは、小林さんに見込まれ財団に入った、冷静な中にも妻籠への熱き思いに溢れる人であった。

ただ町並みの保存というのではなく、自然景観や環境、歴史などをトータルに考え、徹底した状況分析を行い、しかも長期的視野にたち、「観光」という方向で地域おこしを進めていったのである。

「丁度、高度経済成長期と重なり都会がどんどん膨れ上がってい



小林俊彦さん

小笠原宏さん

る時に、反発を受けながらも行った町並みの保存。これほどつともなく大きな功績です」と小笠原さんは語る。住民の熱意とこぢんまりとした地域性によって、各方面の方々の理解を得、保存活動が展開され実を結んだのである。

◇保存と開発の共存

しかし、決して課題が無い訳ではない。町並みの保存を始めて、それを観光に利用していくという背景には「過疎から脱却したい」という強い願望がある。今でこそ年間八十万人もの観光客を迎えるようになってきたが、依然として過疎化が止まってはいない。「保存と開発の両面を持ってやっているので、ここが若者の解釈の中で一番苦しむところ」と小笠原さんは言う。厳しい規制があるから保存

が出来る。それ故に商売の面から考えると難しく、若者の定住化にはつながりにくい。住民たちとの話し合いをもっともっと重ねて、一歩一歩進んでいかなければならないと結ばれた。

◇山峡の美しい村「浪合」

我々研修生一行は、妻籠での研修を終え、第二の研修先である浪合村へ向かった。

長野県の南西端に位置する下伊那郡浪合村は、人口七百五十人余、面積五七・二四平方キロメートル、地域の大部分が木曾山脈東麓の山間地域で、平均標高は九〇〇メートルを超え、寒さは厳しく、全国有数の多雨地域でもある。

その浪合村でお会いしたのが、浪合村産業建設課の近藤庸平さんである。「行動派」の近藤さんに、早速案内してもらったのは、村内で一番高い山の頂上。その日は天気も良く、アルプスの美しい山並みを見ることが出来、実に爽快。一行はそこから、浪合村を眺めた。「地域の様子を知るには、こうい



妻籠での研

う高い所から見るのが一番。物事をこういう視野で見ることですよ」と言う近藤さんの言葉にハッとしました。

◇村全体が村民全ての「浪合学校」

昭和四十年代初めから、寒村からの脱却と地域活性化に資するため、別荘地開発や第三セクターによるスキー場、ゴルフ場の建設などいち早く観光開発を手掛けて来たが、リゾートや観光開発によるむらづくりだけでは、定住化や根本的な過疎対策にはならないということが見えてきたという。

そんな時に新しい村のシンボルとなった「浪合学校」が建設された。(昭和六十一年)この浪合学校は、村立の小学校、中学校及び保育園、公民館が一箇所に集められ、さらに、図書館、集会所、ホール、体育館、プール等が村民に開放されており、文字どおり村民全ての生涯学習と交流の場、文化活動の中心拠点となっている。



トンキラ農園での交流会

はない個性的で魅力的な地域づくりを目指している。(トンキラII「唐臼」とは水力を利用した精米製粉機のこと、この地方の方言)ここでは、おばちゃんたちが明るく活き活きと働いていた。

学校の中を見学して、特に印象に残っているのは、子供たちがきちんと地域学習をしていることであつた。自分たちの住んでいる地域の良いところはどこか?どうしたら住み良い地域になるか?など、実に明快にまとめられたものが、教室に貼られていたのである。「自分の地域を見つめる」という基本的なことを、改めて教えてくれた。

◇活き活き「トンキラ農園」

浪合学校を見学したあと、一行はその日の宿泊先で、交流会の会場でもあるトンキラ農園へ向かった。ここは、失いかけていた山村

の生活と文化及び原風景を再生し、その保存と伝習に高齢者の技能や知恵を活かすことによつて、他に

その日の交流会は、近藤さんをはじめ、飯田市の高橋寛治さんや名古屋市の、福井県池田町など近隣市町村から多くのまちづくり仲間が集まり、まさしく地域を超えた交流会となつた。「自分の地域に愛着を感じるのは、その町の歴史を休で感じてきたから。この地域のことなら誰にも負けないと思う気持ちから生じること。そこに気がつくこと」という言葉が強く印象に残っている。

まちづくりへの思い入れなどについて、夜を徹しての話し合いが続けられた。

◇葛飾北斎と栗のまち「小布施」

長野盆地の北東に位置する小布施町は、人口一万一千八百人余、面積一九・一一平方キロメートル、



近藤庸平さん

半径二キロメートルに全戸が入る

という町である。古くは県下有数

の養蚕地帯でもあり、現在は風土

を活かしたりんごやぶどう栽培、

江戸時代には將軍家へ献上したほ

どの良質の栗を使った栗菓子（栗の製

造や、世界的な浮世絵師葛飾北斎

の町として知られている。まず、

我々一行を迎えてくれたのは、瓦

屋根でしつとりと落ち着いたデザ

インの小布施駅の駅舎だった。そ

こからは、足にやさしい感触の栗

の木のブロックが敷き詰められた

歩道が、北齋館、高井鴻山記念館

へと我々を導いてくれた。寒風吹

き付ける中、我々は町並み修景事

業にまつわる話をお伺いするため、

栗菓子の老舗小布施堂社長の市村

次夫さんにお会いした。豊かな感

性と的確な判断力を持った方で



市村次夫さん

あった。

◇町並みの修景

時の豪商で蘭学者でもあった高

井鴻山が、晩年の葛飾北斎を小布

施へ招き、ここに長らく逗留した

北斎は数多くの肉筆画を残した。

その作品の散逸を防ぐため、昭和

五十一年に「北齋館」が建設され

た。次第に観光客も増え、町もに

わかに活気づいてきた頃、昭和五

十七年に鴻山の隠宅であった「ゆ

う然楼」を高井鴻山記念館として

公開しようとした時に、周辺一帯

を含めた景観整備を町へ提案した

のが、市村さんをはじめとする、

「ゆう然楼」周辺の関係地権者の

方々であった。

自分たちが住み良く、美しい町

並みを作りあげたいという皆の共

通の思いの中で修景事業が繰り広

げられていった。

「徐々にではあるが、地域ブラ

ンド化してきたなあと感じていま

す」「官民一体とは言っても、つか

ず離れずの良い距離感を持った非

常にバランスのいい町ですね」と

言われる市村さんは、「アベックや

ファミリーたちが楽しめる地域に

していきたい」とこれからの思い

を語ってくれた。

◇地域の個性を活かしたまちづくり

小布施堂を後にした一行は、小

布施町地域振興課の富岡良夫さん

をお訪ねした。

「住む人の心を大切にしたい歴史

と文化の共存するまちづくりを目

指しています。快適な住環境を整

備し、内に向けたまちづくりを推

進しています」と富岡さんはいう。

ゆう然楼周辺歴史文化ゾーン、さ

わやか駅前ゾーン、岩松院ふるさ

とゾーンなど、地域ごとの特色を

活かしたいいくつかのゾーンを設定

し、それぞれ目標をたてて整備し、

また「潤いのあるまち環境デザイ

ン協力基準」等の策定により、住



小布施町役場
富岡良夫さん

民と行政が協力したまちづくりを

推進しているのである。

住む人にやさしいまちづくり、

住む人が欲ぶまちづくりを原点と

して進めていくことこそ大切であ

ると痛感した。

妻籠、浪合、小布施のそれぞれ

の地域では、三様の地域づくりを

目のあたりにすることが出来た。

驚きと感動の連続。それはなんと

言っても自分たちの目で見、耳で

聞いたからこそ得られる感動であ

る。研修生たちは、それぞれこれ

からの新たな地域づくり活動へ

の期待や情熱、やる気を胸に抱き、

信州路をあとにした。



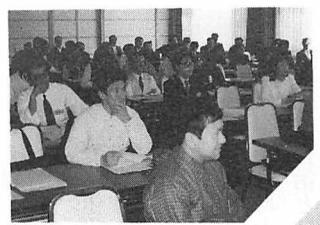
「えひめ地域づくり研究会議」

92年次総会フォーラム

ドラマはその時はじまった！

— 今しか聞けない脇役たちの裏話 —

研究員 国田 敦彦



□ はじめに □

現在、私たちは情報化の中に生きています。中でも、ここ十年というものの、イベントをやればまちづくり、太鼓を叩けばまちづくりというように、新聞やテレビなどのメディアを通して、定義の定かでないまちづくり情報が一方的にとどつと流され、そして、それを見聞きした多くの人たちは、その本質に触れることなく、形だけの「まちづくり人」に仲間入りした気になつているのではないのでしょうか。

そこで、去る平成四年十一月十四日、松山市で開催された今年のフォーラムでは、「えひめ地域づくり研究会議」の代表運営委員の守谷和久、若松進一、岡田文淑の三氏と、大分県大山町の緒方英雄氏

に御登場願ひ、これら「まちづくりにいくさん」たちが何をテーマに行動したのか、その人物史及びまちづくり史を切り口とし、行動の裏側にある哲学を学び、その心意氣を共有することにより、まちづくり元氣の素を感じ取りたいとの願ひの基に開催されました。さて、参加した皆さんは元氣づけられたでしょうか？

まちづくり人物史

□ 自由人^{じゆうびん}行つたり来たり： □

まず、川之江市の守谷和久氏と五十崎町の亀岡徹氏による絶妙なトークショーから：。

川之江市で都市計画研究所中・四国を経営する傍ら、県内外の地

域づくりのシンポなどに東奔西走する守谷氏。かたや、五十崎町商工会長の要職にあつて、小田川の自然を守るため、小田川を舞台に活躍の実践的自然派人間亀岡氏。



亀岡徹氏



守谷和久氏

さて、何時も楽しいお話を聞かせていただくお二人の対談は如何相成つたことでしょうか？

亀岡氏のドラマのスタートはマッキンリーに隊長として登頂したことに始まる。

その取材中の会話の中から：。

・ 何のために山へ登るのか？

「偶然です。人は何のために生きるか、ギリシャの昔から理解した人はいません」

・ 登頂のときの気持ちは？

「やれ、済んだという感じ」

・ 出かける時「ほじゃまた」と言つて出掛けた。

等々

亀岡氏独特の

何とも言えない

感性に包まれた

「よもだ塾」キーワード

会話である。さらに、五十崎町の「よもだ塾」のキーワードにも独特の言い回しがある。

例えば、「ソフトボール外注作戦」。地域づくりを始めれば時間がないので、外注できるものは外注し、時間は地域を考へるために有効に使おう。

また、「心に花があるから星は美しいのです」ということば。絵とは光であり、光がなければ絵は存在しない。また、音楽は音の振動であり、絵や音楽そのものに美しさがあるのではない。これら全ては、人が美しいと感じるから美しい「錯覚の世界」である。

いずれにしても、全て不思議と納得させられる「よもだ塾」のキーワードであるが、これらの言葉の中には、地域づくりの本質が隠されているような気がしてならない。(参考：舞たうん5号)

□ 三つの顔で生きる □

続いて、洗練されたジョークを飛ばしながら、県内は言うに及ばず全国を飛び回る、まちづくりの

ソフトボール外注作戦
五十崎藩、藩主の哲学(美しいネットワフ)と1388点の「よもだ塾」
心は花があるから星は美しいのくす
商品づくりのコンセプトは「癒し」とする
カリス・カスタマ「カ」の物語、
白粉と娘に「オウゴン」と呼ばれている
「よもだ塾」キーワード

楽しさ語りびと双海町役場の若松進一氏の登場。

三つの顔を持つ若松氏。青年団活動を経て役場の一職員として、愛する双海のために活動を続ける顔。私設公民館「煙会所」で、全国や地域の人々と飲み語り合いながら、ネットワークを深め、広げ続ける顔。広域的なまちづくりグループ「21世紀えひめニューフロンティアグループ」で、愉快な仲間たちと精力的に、独創的な活動を続ける顔。

どの顔も人を元気にし、勇気づけるから不思議である。

さて、若松氏のまちづくりの原点とは果たして何なのか？

若松氏が、故郷や人生・生き方を真剣に考えるきっかけとなったのは、高校の遠洋航海実習での大時化での体験という。生死の狭間での体験が、その後の人生に大きなプラスとなって作用したのである。

役場でも一つの挫折感を味わったが、地方自治とは何か、どうす



若松進一氏

れば町民が幸せになれるのかということがおぼろげながら分かったという。このこともマイナスから転じてプラスに作用したのである。

また、若松氏の人生には、人間・時間・空間という三つの「間」が影響を与えたとも…。

まず、「人間」の人生が、人間関係に終始するのなら、この人間というものを大切にすることが自身自身の生き方であると…。

また「時間」という社会の中で、青年団活動・広報活動・公民館活動という三つの活動を通して主張し、ものを書き、ふるさとへの思いが高まってきた。これが非常に大事な時間的な「間」であったという。

さらに「空間」…。青年の船で外国へ行った時の経験から、異文化ギャップというものがこんなにも自分の生き方や考え方を変えていくものなのかと思ったりもしたそうである。

また、とかく犠牲となりがちな「家族」が、常に地域づくり活動の裏側にはあるということを考え

ているという。原点の一つは家族であった。

□ 核心・確信・革新 □

さて、しんがりは、内子町の町並み保存に初めから関わり、内子町を全国区に高めた功労者の一人である内子町役場の岡田文淑氏。

岡田氏は三つの「かくしん」でまちづくりを実践されてきた。

すなわち、次代のニーズを認識することの「核心」。そして、広くて深いネットワークの中で、世の動きを識り、自信を確かめ正確な対応がなされることで持たれる「確信」。さらに、現状には飽きたらない新しい価値観で、自らの社会を実現する「革新」。さて、岡田氏のまちづくりへの情熱は如何にして生まれたのか…？

岡田氏のまちづくりへの情熱は、三十三年前の役場で自らの人生に影響を与えた先輩との出会い、そして十六年間の労働運動によって培われ、このことが、町並み保存に随分と役に立ったという。

町並みの保存という



岡田文淑氏

のは、地域住民が自分の土地建物を提供して初めて成り立つものであり、このことを住民の人たちには納得してもらうことは容易なことではない。この時、過去の経験が非常に役に立ったと…。

また、まちづくり運動とは、どこかに隠されている不満や欠陥を取り除いていく運動であり、これがまちづくり、地域づくり運動のコンセプトだという。

そのため、まず最初は相手の土俵に乗って話をし、次に相手の土俵の上に自分の土俵を築いて自分の話が出るように持っていく。このようなことが地域づくりを進めていくうえでは大切なことだと力説される。

三つの「かくしん」（核心・確信・革新）でまちづくりを実践されてきた岡田氏のお話は、自ら実践された者のみでの体験に裏打ちされた実に重みのある内容であり、心に訴えるものであった。

□ 大山町 裏・表 □

代表運営委員三名のまちづくり裏話に引き続き、大分県大山町の緒方英雄氏に「大山町裏・表」と題して、記念講演をいただいた。

まちづくりの元祖ともいえる大分県の一村一品運動よりずっと前に「梅くり植えてハワイへ行こう」をキャッチフレーズにNPC運動を展開していた大山町。

その後、二次三次のNPC運動を続け、名実ともにまちづくりの先進地となった。

さらに、全国に先駆けて農村型CATVを導入し、ナンバーワンよりオンリーワンの個性あるまちづくりを展開…。その中心的人物であった緒方氏は、大山町のまちづくりのベースの一つ「梅」にこだわり、「梅ほしの主張全国コンクール」を開催するなど、次々と地域活性化のためのアイデアを形にしてきた。

さて、緒方氏の語る大山町のまちづくりとは…？

大山町のまちづくりの原点は三十年前に遡る。当時の町長が、耕地面積の少ない大山町では、米麦に変わる別の何か本当にいいものを選択して作っていかねければならないと考え、梅と栗を選択した。ここに大山町のNPC運動がスタートすることになる。

この運動は、所得を高める運動であったり、人づくりであったり、環境整備であったりした。

今、所得を高めることは出来たが、農家の自立のための教育的対策が課題の一つになっている。

また、人づくりの中のイストラエルへの研修は豊かな挑戦性の習得に非常に役立ち、これが次へのエネルギーとなつていったともいう。

CATVは、ノウハウのある通産省や郵政省ではなく、敢えてCATVとは直接関係のない農林水産省にお願いすることとした。説得には、非常に苦勞したが、本省や県の理解者のおかげで、CATVの事業費はほとんどが補助金で賄われた。この大山町の



緒方英雄氏

CATVの事業をベースに作られたのが、農林水産省の「アグリトピア計画」である。このように、地方で施策を作っていくという時代が既に来ているのだ。

昨年、大山町在住のあるおばあさんのアイデアを基に実施したイベントが、「梅ほしの主張全国コンクール」である。これは、そのアイデアで国土庁長官賞、イベント実施でイベント大賞優秀賞、それを追っ掛けた映像でCATV大賞を受賞した。大山町の原点「梅」にこだわって実施したイベントで三つの賞をもらったのである。

このイベントからは、四つの大切なことを学んだ。

ひとつは、企画段階では、いつもやさしい目で地域を見つめるということ。

もうひとつは、今の時代を自分の感性でしっかりとつかみ、企画を今風にアレンジすること。

さらに、例えば大山町の場合、梅が原点であり、そこへのこだわりというものを大事にすること。そして、今回のイベントでは一

般住民に、梅に関して議論していただいたことが意義深いものであったという。

大山町の三十年にわたるまちづくりについて、裏話を含めて楽しく聞かせていただいたが、その中で、「自分が地域づくりの仕事をする場合、まず自分が楽しむことを考えている」という言葉は実に印象的であった。

食談会では、四つの円卓に別れ、講演で聞き足りなかったことや疑問に思ったことなどを、お酒も入って、口も滑らかに、本音で話す光景があちこちで見られた。

今回のお話を聞いていて、その根底に流れているものは、やはり自分が生まれ育ったふるさとを愛し、そこをいかに良くするかという熱い思いではなかったかと思う。なお、このレポートでは、お話をいただいた内容について、十分にお伝えできなかつた点など多々あるかと思いますが、若輩に免じて、御容赦下さい。

管見 スイスを歩いた2週間／見想録(N)

「棲み分けをした人間自然の本性」 宮本俊一

◇生兵法／通じないコヒ注文

「プリーズ、エッグ、クッキング、OK?」「オー、オムレット?」「ノー、ベーコンエッグ、アンド、ポタージュスープ」「ベーコンエッグ、スープ、イエス」

私の怪しげな会話は、スイス研修第一日目の夕食だった。チューリッヒ湖畔からジール川に抜ける運河へ…。近自然工法の実地見学は、毎日を殆ど歩かない私には苛酷。足の筋が張るし、腹痛は下痢の気配。そんなことでグループ結団の宴席を断り、独り宿へ帰った。ともかく腹を下して…横になったが、今度は空腹。やむなくホテルのレントランへ行った次第。

何とか餌にありつき、最後に「プリーズ、コヒ」と言うと、ウエートレスはにこやかに「コフィー」と訂正した。味をしめた私は数日後、同じレントランで「プリーズ、

コフィー」とやったが通じない。

「COFFEE」と言えばますます混乱。ふとドアの外を見るとグループのOさん。飛び出して事態を話せば「カフィー」と教わる。おかげで彼女をパス。やはり生兵法はダメか…とカッケン。

◇古代が／多言語多様文化の源

言葉といえば、スイス連邦憲法はドイツ語・フランス語・イタリア語・レイトロマンシュ語の四つを国語としており、ドイツ語系七四%、フランス語系二〇%、イタリア語系五%、レイトロマンシュ語系一%の人びとがいると聞く。

さらに、各州の公用語は邦(州)よりも邦が適切との説で変更)に決定権があり、邦によっては二つの言語を決めている上、同言語でも地域のナマリが強く、外国人は英語のほうが通じ易いとも言。

在スイス日本大使館編『スイス

連邦便覧』(日本国際問題研究所)等では、鉄器時代のスイスにはケルト人の一部族がいたが、BC五

八年シーザーに征服されローマ化した。東部でレイトロマンシュ語を話すのはその子孫と言う。またティチーノ地方でイタリア語を話すイタリア系スイス人の先祖はロングバルト族で、早くにローマ化し文化的・社会的にはイタリア風との話。その後四世紀～五世紀にかけ、まずブルゴニ族がジュネーブ地方に侵入。ローマ人と同盟してローマ化し、フランス系スイス人の先祖となるが、文化的にフランス的色彩を維持し、フランスに親近感を持つそうだ。

五世紀末には、ローマと戦ってきたアレマン族が他のゲルマン部族の圧迫を逃れ、ライン川を渡りアーレ川の線まで進出。ドイツ系スイス人の先祖となる。彼らはドイツ語を使い、文化的・性格的にもドイツに似ているが、政治的にはドイツと区別して、スイス市民主義を固守している。なおアーレ川で画したドイツ・フランス語

両系の境界は、その後一五〇〇年来変わらないとか…実に面白い。

◇侵略／「言語の平和」で守る

ところで、第四の国語レイトロマンシュ語は、他の三つが一八四八年初制定の『連邦憲法』で決定されたのに対し、九〇年も経たない九三八年国民投票で憲法改正を行い国語としたものだが、宮下啓三著『七〇〇歳のスイス』(筑摩書房)によれば、レイトロマンシュ語は、ドイツ語やイタリア語に押され、話す人が次第に減った上、邦の中学校以上ではドイツ語なので、この言葉しか知らない大人は事実上存在しないとのことだ。

では、何故そんな言葉を国語に…?と思われるが、当時ドイツとイタリアは、「同言語地域は一つの国家」を謡ってスイスの安全を脅かし、ムッソリーニはレイトロマンシュ語地域も同言語圏だとの主張で、その領有を狙っていた。そこで、スイスの人は国民投票で、言葉を理由に国の統一を犠牲にする考えのないことを示し、使

ないことを確認。他国の侵略を『言語の平和』で守ったワケだ。

◇理性／仏語地域司令官を選ぶ

『言語の平和』というのは、スイスの人が誇り高く謡う言葉だそうだが、私にはそれがスイスの人の第二の本性かと想われる。例えば、連邦政府の大臣に当たる七人の「連邦参事会員」は、全邦議会と国民議会の協力で選ばれるが、憲法で一邦から複数は選べないとしている。ところが憲法の規定がないにも拘らず、ドイツ語地域四人、フランス語地域二人、イタリア語地域一人の選出が伝統となっており、『言語の平和』を守ることを不文律としているようだ。

さらに劇的な話は、第二次世界大戦直前の一九三九年八月、連邦政府は両議会の合同会議に、「非常時大権」「中立宣言」の権利承認に加え、『スイス軍総司令官』の選出を求めた。候補はドイツ語地域とフランス語地域出身の二人。議員数はドイツ語地域が圧倒的だったが、結果は投票数二二九票の内二〇四票で、フランス語地域

のアンリ・ギザン將軍を選出した。ドイツ関係が極めて悪い時…この選択。スイスの理性は毅然として中立姿勢を示したのだ。その九月ナチスはポーランドへ進撃した。

このほか、『言語の平和』に対するスイスの努力は、枚挙にいとまなく事例がある上、人びとのあらゆる生活の場にみられるとか。

◇異族／共通は人間自然の本性

「スイスの歴史といえ、すぐウイリアム・テルの伝説と『リュトリの誓い』を思い出す。スイスの建国というわけだ。事実、一九一一年のこの『誓約同盟』が結ばれた八月一日を、スイス人は建国記念日としている。しかし、実際に連邦国家スイスの成立は、一八四八年のことで、その以前のスイスは小国家同士の同盟であり、一つの国ではなかった。一国の歴史として考えれば、スイス史は一八四八年に始まる。だが現代史の理解のため、統一以前のスイスを知っておく必要がある。そこで、中世以来の歴史を見ておく…」

これは矢多俊隆・田口晃著『オー

ストリア・スイス現代史』（山川出版）冒頭の要旨略記である。勿論、私はこの説を拒むものではない。だがスイスの人たちの『ヒューマン性の源』を探る私には、前掲『連邦便覧』等から想像し、少なくともシーザー以来この地域で、色々な種族がそれぞれの生き方を求めて棲み分けをした。その時代にありように想えるのだ。

シーザーに征服されたケルト人は、それ以前に豊かなフランスへ侵攻した殆どのケルト人と異り、平和を愛して残った種族だろう。

また、ローマ軍の徴用で侵入したが、撤退では同行を拒み残存したイタリア語系スイス人の先祖。フランスから条件の悪いこの地にきて、ローマ化したフランス語系の先祖。他のゲルマン族から逃れてきたドイツ語系の先祖…等々を想うと、もともと争い事を好まない他種族同士が、厳しい自然で棲む人も少なく…これという産物もない貧しい土地だから、支配勢力の争いの的にもならない…。そんな平和な地域の故に、貧しくても良

い…安住を求め棲み分けをした。これがスイス人の先祖だと想う。

とは言え、やがてこの地は神聖ローマ帝国の一部となり、封建的な身分区分もできるのだが、生産性に乏しい土地だから、自然の悪条件と闘うため、地域の人びとみんなが力を合わせる必要が生れ、上下の隔てよりも…民主的な話し合いと協力を基礎とした…『自治の精神とシステム』が育ったのではないか。（前掲／「七〇〇歳のスイス」等）

こう考えると、またもルソーの人間論の原則を見る感だが、スイスの人びとの原初。古代この地に住みついた各種族の共通項は、人間自然の本性に近い『ヒューマン』な情念を行動源とし、他の生物にみる棲み分け…『共生と連帯』の生き方を模索していたようだ。

私は、それ以後のスイスの人びとの営みは、この素像を現代のスイス民主主義へと洗練して行く、血みどろな試行錯誤の歴史であり、私が狙う「地域づくりのベース」の鉾脈だと想うが…幻視なのか。

旧別子の思い出

松山市 玉貫陽子

夫や俳友達と共に伊予三島から別子山村を経て旧別子を訪れたのは、閉山五年後の昭和五十三年の五月でした。足に柔らかい弾力を返してくる落葉の道を踏んで足谷川沿いに登る。盛時、一万人が住んだという流域には、接待館の赤煉瓦塀、醸造所の煙突、そして住宅、小学校、劇場跡などの丹念に積まれた石垣が残っていた。煙害で枯れ果てたこの地に、住友は植林を続けて緑が戻りつつあった。

「大露頭旧別子いま緑なり」
落葉松や杉の新緑の下の草生は、ひんやりとして明るい静けさに包まれていた。白い岩々の峡谷の水は澄み、みつば躑躅や馬酔木の花が川風に吹かれていた。

「目度町馬酔木の花の無音の鐘」
けれど川床は製銅の廃水で黄に染められたままだった。登るにつれて風景は荒涼となる。燂鉦炉や



歓喜坑

製錬所附近の石積みには鉦滓がへばりつき、赫い地肌をむき出しにした斜面には錆びたレールや機械が放置されていた。峯近くまで登った時「歓喜坑」があった。立札に「三百年前、足谷山中を彷徨して漸く発見した露頭に肩を抱き合い感涙にむせびつつ歓喜の声をあげた」とある。しんとした思いで周囲を眺め、坑口を覗いた。

「歓喜坑石より清水滴り落つ」
谷から霧が湧いてきた。コンクリートの砦のようなものが幻のように浮かんで見える。「蘭塔場」だという。閉山後三年目に発生した大火災で死亡した五百人余を祀っている。この狭い峡谷に響い

た阿鼻叫喚の声を想って慄然とした。



て、私は何となくがっかりした。坑道のレーザー光線の騒がしさ、長身長髪の鉦山夫の人形、旧別子山中で

二回目は翌年、新居浜から東平を経てヒュッテに泊った。明治三十二年、足谷川の大水害の後、東平に大半の設備が移った。社宅の竈だけが整然と並んでいた。山小屋は伊藤玉男さん夫婦が管理していて、旧別子を守る熱っぽい話を聞いた。翌日、銅山峯を越えた。昔の牛車道である。旧別子と新居浜間の往来は長い間銅山越えをもつてされた。峯附近は風が強く、崩れ易い道は歩き難い。峯からは旧別子が一望出来る。山の上部に緑はまだ戻らず、煙害の凄まじさを残していた。

「禿山が陽炎うこれぞ旧別子」
歓喜坑を再び見た後、足谷川沿いに下って別子山村へ出た。

昨年十一月、端出場跡のメイントピア別子に十三年前の思い出を抱いて訪れた。観光坑道の入口に「歓喜坑」と記されているのを見

の感動は伝わってこない。

一昨年開通した大永山トンネルにより銅山峯を越えることなく易々と別子山村へ出た。別子山村棧津山荘で買った写真集『銅の里』の編者が伊藤玉男さんだったので電話をした。私達を覚えてくまの形で保存するとの住友さんの意向に従って、自分達は守っています。新居浜市は端出場から東平までロープウェイをかける計画をしているそうです。東平も変るでしょう。観光と保存は難しい問題です。そうなる前に一度いらして下さい。ご案内しますよ」と話された。俳句は故玉貫寛作

今回は日本退職女教師連合会県支部会長、俳誌「紅白」同人久保田ユズル様（広見町）にお願いいたします。

二十一世紀は花咲翁

瀬戸町 佐々木豊彦

前号で私を指名された清水英氏は東洋医学の同志であり、全人的医療に生きる臨床家、思想家として常に啓発して下さる学者です。

私の歴史的視野狭窄を昌益、梅園、藤樹、その他を通じて直して下さいました。この場を借りてお礼申し上げます。

私は佐田岬で、古里の田舎医者をしていきます。

昭和四十一年、父の没後、農地や山林などの遺産相続をしました。その運営に四・五年の試行錯誤を繰り返すことになりました。

あの松枯病の蔓延で松木山は全滅しました。その跡に桧苗を植えたのを皮切りに約一万本植林しましたが、山林より難しいのが柑橘園の処理でした。祖父が開墾し、丹

精込めて育てたように私は私には出来ず、人に貸してもみました。がうまくいきま

せん。ところがある日、転機がありました。当時、県医師会会長であられた今川七郎先生から電話があったのです。先生がお庭を改植するに当って掘り取る十年生の桜が四、五本あり、半島の私の山へ移植してはどうかと言うお電話でした。

早速、私はクレーン車で庭師さんと松山へ行き、桜木を三機の密柑山へ運びました。六人の人夫さんが一生懸命に働いて最後の一本を植え終ると日はとつぷりと暮れていました。海拔百五十メートルの密柑山から真下の港の夜景が迫るように見えました。その時、ここ

が最高の眺望の場所であると分りました。よし此所に桜山をつくろうと即座に決心がきました。祖父の啓示だったのかも知れませんが、先ず町道から延長百五十メートル、幅員三メートルの私道を園の中央まで通し、祖父が植えた夏柑の老木（山口県の萩から取り寄せ

た）を伐採して、毎年早春に桜苗を植えていきました。また、「日本桜の会」に入会して年中花を觀賞出来る花の品種選びの勉強もしました。十月から觀賞出来る十月桜も植えました。桜のおかげで江戸時代の再評価も出来ました。一町歩を植え終りましたので、現在は周辺の町道を桜並木として美化すべく毎年十本ずつ植樹しております。最初に松山から移植した桜は、今川先生記念樹として「今川桜」と命名しました。百年耕し続けた地味を吸収して成長著しく、私の一抱え半の大きさになりました。学名は「オオシマ桜」です。もう一本の「駿河台桜」は「番町桜」と命名しました。

平成二年春には橋本大二郎氏を主賓として観桜会を開催しました。その華便りに「小指のような苗木を植えて、草刈り、水やり二十年……」その日は快晴、思い出の桜日になりました。

“満ち足らふことは美しし八重桜”
風生

“散る桜残る桜も散る桜”
良寛

次は、新しい開かれた医療をめざす八幡浜医師会会長山本久夫氏にお願ひします。



……リレーでちょっとク……

なめかわ
「滑川ためとも祭り」
を終えて



川内町桜花塾

塾頭 本郷茂孝

道後平野の東の端に位置しております。

「桜花塾」は、平成元年の十二月、町の呼び掛けで、川内町若者塾として結成され、平成二年から県の指導の下に活動を続けて来ました。活動を続けるうち、若者塾という名前と塾生の年齢がそぐわないのではないかと言うことから、平成四年に行った「滑川ためとも祭り」を町民にアピールする前に、町の花である桜にちなんで「桜花塾」と改名しました。

塾活動を始めた当初は、活動計画とか、目的が決っている訳でもなく、川内町の将来に関心がある者が集まって話し合いを持てればそれで良いという事でした。メンバーの中で私が一番年上という事で、塾頭を命じられ、軽い気持ちで引き受けたのでした。何をしたらよいのかも分からないまま、会合を重ねていきました。塾生の人数は十名余りですが、職業は様々で、農業、自営業、農協職員、役場職員、サラリーマンと、いろんな人が集まっています。中には、同じ町内

に居ながら、初めて顔を会わずという人もいました。後で考えてみると、うまく行政に仕掛けられ、始めは「死事」だったのが、続けて行くうちに「志事」に変わっていったというような気がしています。

平成二年度に入り、町の歴史・資源・町政・文化について学びました。また、新しくメンバーも増え、町内や町外から講師を招いての勉強会も持ちました。先進地視察のため泊まりがけの、県外研修も行いました。川内町にインターチェンジが出来た時、どのように土地利用を進めて行けば良いかというテーマで、岡山県の津山市を視察研修しました。津山市では、二つのインターチェンジをうまく利用し、工業団地を造って地元産業を起こしています。また、文化面でも独立したものを確立しており、とてもすばらしい所との印象でした。

県主催の研修会の時「一年目は自分の町を知り、二年目に将来どうしたら良いか話し合い、三年目に行動を起こす」これが、一番良

い例だと聞かされておりました。

そこで、平成三年度は、町民に何を訴えるか、そのためにどういう事をしたら良いか、色々と話し合いました。川内町では、人口が増えているとはいえ、地域によっては過疎になっているところもあります。そんな現実の中で、どうしたらまちおこし出来るのか。

ひとつの手掛かりを探すため、過疎からの脱却に取り組んでいる高知県の大川村を訪ねました。人口七百五十人の過疎からの脱却を目指し、「謝肉祭」などで全国に名を知られるようになった実績を聞かされ、大変勉強になりました。

また、愛媛県まちづくり総合センターの協力で、島根県吉田村の藤原洋先生や内子町の高須賀忠篤先生のアドバイスや講演を受ける機会も得ました。二人の先生との話し合いの中で、川内町の現状が端的に出たように思います。曰く、「松山市の近くに位置しているため、町民は、何をしても食べていけると思っており、川内町をなんとか発展させようという緊張感に



北方大興寺で
桜花塾
定例会

欠ける」松山市のベッドタウンとなり、仕事が終われば、川内町に帰るだけでは、町を良くしようという気持は起らないだろう。このような現状の中で、どうしたら良いか、皆で思案した結果、美しい自然の残っている滑川の地で、塾生が育てた和牛を使つてのバーベキューを実施する事にしました。滑川には、平家の落人伝説があり、また、源為朝の墓があることからイベントの名前を「滑川ためとも祭り」としました。準備に半年以上かけ、大川村の「謝肉祭」へも

滑川ためとも祭り

バーベキュー
風景



勉強を兼ね、試食にも行つて来ました。塾活動も最初のうちは、二ヶ月に一回でしたが、毎月一回ずつ集まるようになり、それがイベントを計画してからは、月一回では済まなくなりました。バーベキューに使う道具も、網が良いか、鉄板で焼くのがうまいか、何回も試し焼きをしました。材料代は町に補助していただき、道具は塾生の職業や特技を活かして、全て手作りで作りました。大工さんがテーブルや椅子を作り、鉄工所へ勤めている人がドラム缶を利用した火鉢や鉄板を作り、絵

滑川ためとも祭り
あめのうおの
つかみ
どり



心のある人がTシャツのイラストを考えるという具合です。看板も徹夜で作成しました。コップや皿は、環境問題を考え、全て竹で作りました。イベント当日は、滑川地区の人達や町内から協力者を募り、盛り上げました。そして、いよいよイベント開始。中学生の「川中太鼓」に始まり、専門家による弓の試射、子供達による魚のつかみ取りなどのアトラクションの後、三百人余りがバーベキューを楽しみました。地域の人達と一緒にイベントを行う事を一番の目的とし、イベン

トなど縁のなかつた塾生が一丸となつて計画から実行まで、全てを自分達の力でやり遂げたのです。小さなイベントではありませんが、これが川内町の大きなイベントの始まりである事を願っています。苦しさを乗り越えてみれば、いつのまにか塾生のチームワークが出来あがつていることに気付き、塾頭として、本当にうれしい限りです。これからは、自分達がやつて来た事が継続されるよう、若い仲間を増やしていくことが我々のひとつの使命になるだろうと思つています。

『山、土、水そして、人々の
ふれあいから創造される
村おこし』

西条市 ^{おおふき}大保木をよくする会
事務局長 神野 ^{けん} ^{しょう} 顕 彰

として全国からの信仰を集め約千
三百年の歴史を有しています。

西条市大保木地区は、その石鏡
山への表参道を市内より山間部に入
り、鬼の山地区から南北に約二
十キロにわたり広がる山村地区で
あります。

この地区は、昭和三十一年に大
保木村から西条市へと合併しまし
た。その当時、約八百世帯四千人
程いた人口が、現在では、約二百
世帯四百名足らずの人口となつて
しまいました。

次々と廃校閉鎖されていく小、
中学校の幕切れに出会う度、地区
住民の失望感が増幅し、次世代へ
の存続をあきらめてしまふ深い悩
みへと移行いたしました。(現在も
その思いは、地区の多くの人々の
心に存在し続けているものと感じ
られます)

そんな時代の流れの中、大保木
公民館の活動が地区の伝統文化や
行事を継承していく中心的な存在
でありました。そして、公民館の
協力委員会が開かれる度に衰退し
ていく現状を目前にし、ただ腕を

こまねいて傍観しているだけでは
余りにも寂しく、「何とかならない
ものだろうか」と言う声となり、
やがて行動となつて表れてきまし
た。
それは、いろりを囲んで川魚料
理を楽しむお店「和起和起亭」の
オープン(現在、事情により休眠
中)、公民館主催による市内の小中
学校児童を集めてのサマーキャン
プ「石鏡天狗村」の開設等々と、
次第に何とかしようと言う意思が
形となつて息づくようになりまし
た。
そして、時代は昭和から平成へ
と変り行く時、この地区に「ふる
さと創生資金」を活用して、廃校
となつた高嶺たかね小学校跡に自然体験



神野顕彰さん 会長 藤原忠男さん

学習施設「石鏡ふれあいの里」を
開設してはという、誠に有り難い
企画が西条市よりもたらされ実施
されました。また、それと同時に、
この施設を通じ様々なイベント活
動や食堂及び宿泊施設等に従事し、
支えていく地元組織として「大保
木をよくする会」が結成され、平
成二年度のオープンと同時に実働
するに至りました。

この会は、「石鏡ふれあいの里」
を拠点とし、そこから市内外の
人々に様々な自然体験学習の場を
提供、発信することにより相互の
意識の向上と、活性化をもたらす
ことを趣旨として運営されてお
ります。

例えば、春の山菜を楽しむ会、
夏の盆おどり大会、秋のいもだき
や運動会、猪肉、キジ肉、鴨肉の
大鍋大会、冬の餅つき道具及び施
設の無料提供等々、そして、平成
三年度より秋の土、日曜日の二日
間にわたって開催した「アウトド
ア ミーティング イン 石鏡」
と銘打つてのマウンテンバイク
(全地形型自転車) 競技大会は、

「水の都」西条市は、西日本最
高峰の石鏡山への表玄関であり、
市内各所に湧き出する自噴水は、
石鏡山系の山々を源として加茂川
へと流れ、地下に潜り、いにしえ
より地域の人々に豊かな恩恵をも
たらして参りました。

また、石鏡山はその昔より霊山

マウンテンバイクに乗り
疾走するジュニア達



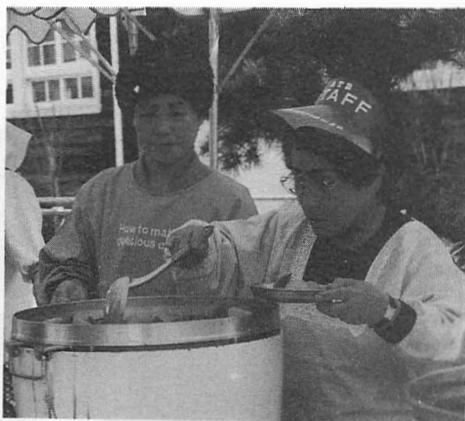
この事は、市当局の適切な御指導と助成はもとより、市内の各種団体の御協賛、御協力の賜物であり、決して忘れてはならない感謝と感動を覚えるものであります。



前夜祭のコンサート
なつかしきオールディーズの
リズムにのって

西条石鎚ライオンズクラブの絶大なる御奉仕をいただきスタート致しました。このイベントは、年間行われる各イベントの中でも、県内外から多数の競技参加者と見物の人々を集め、最大のものとなりました。そして、第二回目の昨年度は、十一月十四日（第二土曜日）：九月より開始された小中学校の休日を利用して、生徒達の参加を働きかける（十五日（日曜日）の両日にわたり、第一回目より更に多くの各種団体や御奉仕の方々の輪が広がり、約百二十名のスタッフのもと、大会初日の「石鎚ふれあいの里」より黒瀬湖を一周するコースのオリエンテーリング競技二日目の山坂を上り下り疾走するクロスカントリー競技の総参加者は、二百五十名を越え、一般来場者は前夜祭を含め千名を越えるという一大イベントとなりました。

おでんの味も
バツグンですよ



それは、山、土、そして水と人々から生み出されていくものであります。私共は、そのお手伝いをさせていただく存在であり、大いに楽しみ活動していくことが、地区活性化への道程であると思う今日この頃です。

焦ることなく悠々と……。



クロスカントリーレース
開会宣言
「エイエイオー！」

このイベントに集まった若者達が、難路を疾走する姿、そして四季折々に行うイベントに参加していただく人々との交流とふれあいを通じ、今後の地区の活性化をひたすら確信し、そのエネルギーがやがて血となり肉となって、新たな創造力を生み、定着していくことを「大保木をよくする会」の夢とするものであります。

今後、私共が、心掛けようとすることは、石鎚山を初めとする様々の自然を背景とし、「石鎚ふれあいの里」という核に訪れる人々との交流の中で、生み出されていく知恵や活力を、この地区に形作り、定着させていくものでありたいと思っております。

「擬洋風建築」讃歌考

宇和島市立歴史資料館

館長 山口 薫 永



四、宇和島の山手寄りの角屋敷に白亜の洋風館が建築されている。建物総面積は四二三平方メートル(二二七・九七坪)。洋風小屋組み(トラス)を採用したポーチつき木造

二階建て建物は、まさしく典型的な「擬洋風建築」。このいわゆるハイカラ建物を指して薄命の漢詩人、中野道遙(宇和島市出身)は

「丹楹白壁日華二輝ク 市人訝リテ問フ 何ノ治ムル所ト…」と謳ったのであったが、実はこれ、旧宇和島警察署庁舎なのである。

この種の建物構造、景観は、中世のルネッサンスに流れを汲むパラディオ方式(簡素な美しさ、全体構成を重視する)を擬したもので十八世紀中頃、西欧で普及をみた建築様式といわれるが、ちなみに、洋風建築工法が我が国に移入されたのは明治二十年代後半というのが通説。その点、動力による技術を持たない昔日の斯界では

冒頭、「擬洋風建築」なる用語について専門書は「幕末、明治初期の頃、西洋建築の体系的学習がなされる以前に見られた和洋折衷的造形」と解説している。

往日、工匠たちが見よう見まねで西洋の建築様式、意匠の彩どりにバイタリティーを見せるが、その奇想性も明治二十年前後には影をひそめたとか。いわゆる、これが「擬洋風建築」たる所以である

ところで明治十七年(一八八



柚師と呼ばれる人が、大きなハツ

リで素材の一面、一面を丹念にハツつていき、その柚角で部材を組立てていく。つまり、それは徒弟

修業の間に培われた経験、勘が資本の工匠渡世であったともいえる。時代のシグナルは維新動乱の時を経て文明国家への邂逅を告げる。

異質な文化との邂逅に工匠たちも又、洋式工法へあくなきロマンを

馳せていく。前掲・白亜の洋風館の聳立はそうした時流に先行した未知への挑戦である。忘却の

彼方に秘められた工匠たちの汗涙史が彷彿として

偲ばれるが、ともあれ「後世に遺せるものは文化しかない」と燃えた男たちの美学は、飛行機の原理

を考案し、藩船を建造した先人たちの栄光に比肩されるテーマと思想される。過ぎ去りしも…。昭和

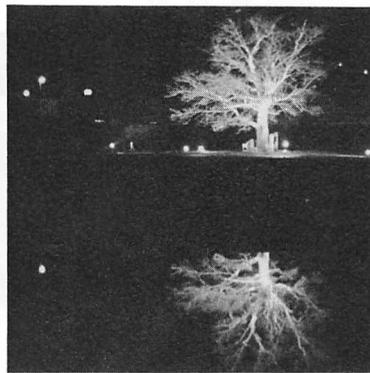
和二十七年、この建物は南宇和郡西海町へ移築された経緯があるが、この種の擬洋風建築は歲月経て札幌時計台など、主として関東以北に三十施設が残存するに過ぎない。顧

みれば、創建以来、実に齢一〇八年に亘る星霜春秋を見詰めてきた、この語り部は、いま、当地お台

場(旧藩時代の砲台配備地)隣接地に松材の薫香馥郁、民俗文化伝承の殿堂として三たび白壁日華に輝くのである。

ふるさと川の川を背景に小さくて
熱いイベントをしました

五十崎町 野中 恵美子



●実行委員会結成

私たちの町には小田川が流れて
います。五十崎へ来られた方は異
口同音に「きれいな町ですね。町
の中央には川が流れているんでき
ね」とおっしゃいます。

その小田川河川敷には、樹齢二
百六十年といわれる大きな榎の木
があります。この榎をライトアッ
プし、イベントをしたいと考えた
私たちは「大きな榎の木の下で実
行委員会」を結成し、昨年末、こ
の企画を実現することができたの
です。

●榎の木のライトアップと
メルヘンの世界

「神宿る」と言われる神聖
な大木にライトをともし、そ
の回りで子供たちを集めて遊
ぶ。しかも年の瀬の夜、ファ
イヤーを焚くという発想は誠

に常識も時期もはずれた企画の
ように思われました。しかし打
合せ会を重ねるごとにスタッフ
は盛り上がりを見せ、町内では
「十九日の夜、小田川原っぱで
何かおもしろいことがあるら
しいよ」と、人々のささやきも聞こ
えるようになったのです。

そして当日、スタッフの予想を
はるかに越える百人余りの参加者
を得、スタッフと参加者が一体と
なって、しばしメルヘンの世界を
楽しむことができたのです。子供
たちの手でライトアップされた榎
の木はみごとに小田川の水面に映
りました。

●小田川や自然への想い

実はこの榎のライトアップには
町の人々の、小田川や子供たちへ
の熱い想いがこめられていたの
です。

五十崎町では、「小田川の水を守
るための提言」をテーマにアイデ
ア募集をしました。その時のアイ
デアの一つに「小田川河川敷のシ
ンボルである榎の木にライトをと
もすことで、自然や水の大切さを

考えて欲しい」というのがありま
した。また一方で、今の子供たち
にはふるさとの自然を背景にした
遊びがほとんどありません。その
ため「ふるさとは遠くにありて思
うもの」ではなくて「ふるさとは
遠くにありても思うもの」となる
よう、五十崎の風景を映像として
残せるような遊びを企画したいと
考えた人たちがいました。

そして、自然と人が一つになっ
て静かな流れの中で、人々の心の
中にいつまでも感動が残るような
イベントをイメージした人がいた
のです。

●スタッフは寄せ集め

スタッフは自発的に参加した町
内の有志。役員職員、商工会や青
年団のメンバー、会社経営者、主
婦、警察官、僧侶など職業はさま

ざまでした。

日頃は社員の前で胸をはって
いる社長さんが懸命に焼きいもを焼
き、学校で事務をとっているおじ
さんがシンセサイザーを弾きまし
た。嫁、姑が仲良くだんご汁を作
り、青年団のお姉さん、お兄さん
はゲーム、クイズ、ダンス、ファ
イヤーと大活躍。お坊さんはお説
教をしたのです。

みんなの気持ちがあ天に通じたの
でしょうか。その日の穏やかな天
気は神様からのすばらしい贈りも
のだったように思います。

●メッセージ

私たちは、自然や人や全てのも
のに感謝と願いをこめて、次のよ
うなメッセージを送りました。

『きれいな水が流れる小川や河
川は私たち人間にとってなくては
ならないかけがえのないものです。
子供たちが成長し、大きく羽ばた
いていく頃にも今と変わらず、きれ
いな小川や河川であって欲しい。
そして、今以上に多くの楽しみを
見つけることができる様、願って
います。』



「今治地方観光情報センター」 JR今治駅内にオープン 今治市

い観光地や水軍の歴史、新鮮な魚料理など多様な観光情報を提供し、今治を訪れた人を楽しい旅をしてもらうための施設として、このほどJR今治駅内に「今治地方観光情報センター」を開設しました。

平成十年には西瀬戸自動車道が開通する予定で、今治市と越智郡の連携はさらに密なものになります。このため、今治市では、今治地方（一市十町五村）のすばらし

当センターでは、女性職員が窓口で観光案内に応じる（午前九時～午後五時）ほか、大型テレビによる観光PRビデオの放映、知りたい観光情報を検索できる観光情報検索機（ビデオで紹介）、カラー



コルトンによる観光名所の紹介、特産品の展示などを行っています。このほか、今治港ともテレビ電話でつなぎ、船の利用者にも職員による観光案内サービスができるようになっています。こちらへお越しの節は、大いにご利用下さい。

“ながはま”ってどんな“まち”？ ふるさと長浜フォトコンテスト 《冬》の部 レンズからのメッセージ 募集中!! 長浜町

海・山・川などの大自然、長い歴史の中で培われてきた伝統、郷土芸能、歴史的遺産、四季、草花、人の営みなど、「長浜」のすべてを

被写体とし、一枚の写真におさめてみませんか。素敵な作品をお待ちしております。

《応募要領》

- ◎受付／平成五年二月二十八日迄
- ◎作品／未発表の作品に限る
- ◎対象／長浜町内にあるもの、見られるもの、行われるもののうち冬をイメージさせるもの。
- ◎応募／カラープリント四ツ切で裏に住所・氏名・年齢・連絡先・画題・撮影年月日・撮影場所を貼

付。応募点数の制限はなし。作品は返却しない。入選者はネガを提出のこと。

- ◎賞／推薦3万円（1点）・特選2万円（2点）・準特選1万円（5点）・佳作テレカ（10点）
- ◎問い合わせ・申込先／喜多郡長浜町役場 企画調整課「ふるさと長浜フォトコンテスト冬の部」係

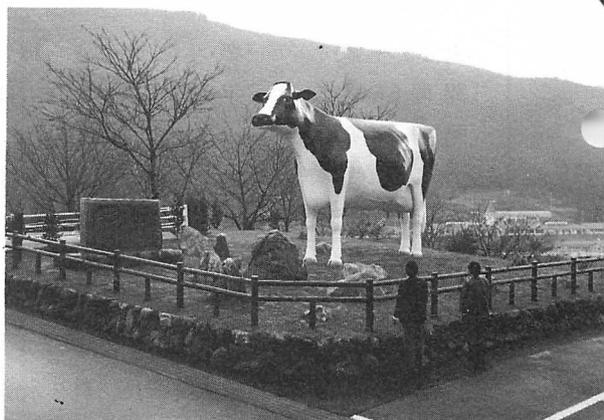
☎〇八九三（五二）一一一



酪農の町「野村」のシンボル 日本一の乳牛像完成

野村町

ミルクとシルクの町・野村町に
ふさわしいジャンボ乳牛像が、野



村ダム「朝霧湖」を見下ろす高台
に、その勇姿を現しました。

この像は、本年が野村町の酪農
創始五十周年にあたるのを記念し
て、「野村町酪農創始五十周年記念
乳牛像建立委員会」により建設さ
れたもので、酪農を支えてきた先
人の功徳をたたえ、これからの地
域の活性化と酪農家の団結を図る
とともに、「酪農の郷・野村」の
更なる発展を願って、町のシンボ

ルとして建てられました。

高さ四・二メートル、長さ六・
五メートル、幅二・二メートルの
この像は、鉄骨に金網を張り、地
元の有能な左官の皆さんの手でモ
ルタル仕上げされたもので、大き
さや出来映えは名実ともに「日本一」。
水と緑の自然豊かなリフレッ
シユゾーン・野村ダムに、ぜひ足
をお運び下さい。

これからは、このジャンボ乳牛
像が、皆様を優しく出迎えてくれ
ることでしょう…

鹿野川しゃくなげまつり

3月28日(日)

～4月29日(祝)

肱川町



喜多郡肱川町鹿野川の花の名所
「丸山公園」には、約三千本を越
えるシャクナゲが、淡いピンクや

純白の可憐な花をつけ、訪れる若
い女性やカップル、家族連れを楽
しませてくれます。

肱川町観光協会では、例年この
時期に『鹿野川しゃくなげまつり』
を開催し色々なイベントを行って
います。

シャクナゲは、四月初旬から四
月二十日頃まで楽しめますが、こ
こにはヤマブキ、エビネ、ツツジ
なども数千株植えてあり、期間中



花が絶えることはありません

また、近くには、テニスを楽し
める「鹿鳴園」や、桜、ツツジの
名所「鹿野川園地」があります。
さらに、四月初旬の鹿野川湖沿い
の樹齢三十年の桜並木は圧巻です。
是非一度「春の肱川町」をお楽
しみ下さい。

お 知 ら せ

『第13回全国豊かな海づくり大会』の基本方針決まる。

〈開催目的〉

水産資源の維持培養と海の自然環境保全の必要性を広く国民に訴え、国民の意識啓発を図るとともに、わが国水産業の振興に資する。

併せて、本県において開催されるにあたり、「つくり育てる漁業」を一層推進するとともに、沿岸海域の環境を良好な状態に保つよう努めることにより、本県水産業の発展と地域の活性化を図る。

- 〈大会テーマ〉 『夢・生命^{いのち} きらきら輝く海づくり』
- 〈開催時期〉 平成5年11月7日（日）
- 〈開催場所〉 伊予市森（森漁港）
- 〈主催〉 豊かな海づくり大会推進委員会、愛媛県
- 〈後援〉 農林水産省
- 〈大会参加者〉 約1万人（県外招待者2千人、県内招待者2千人、県内一般参加者6千人）

- 〈主な大会出席者〉 天皇后両陛下
衆議院議長、農林水産大臣、愛媛県選出国會議員、
水産庁長官、中央漁業団体の長、愛媛県議会議長・
議員、県内市町村長・議長、全国漁業関係者等

〈大会内容〉

- 歓迎行事 大会参加者を歓迎するための郷土芸能や小・中・高校生等による演技の披露
漁船によるパレードや船上アトラクション
- 式典行事 水産資源の維持培養や海の環境保全に功績のあった団体等の表彰、大会決議等
- 放流行事 大会参加者によるマダイ、ヒラメ等の稚魚の放流
- 関連行事 水産業関係の展示、写真・絵画の展示、県内特産物の展示即売等
- その他 歓迎レセプションの開催（大会前日）

今年も、百花に先がけて、梅の花が咲きました。
まだまだ冷たい風の中で、空に向かって突き上げるような枝に散らばる白と紅の優しい花が、春の訪れを予告します。
花言葉は、「澄んだ心」。
私の大好きな花です。

今回、TOWNタワーパソコン通信ネットワークは、都合により休載いたします。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のM.S.（安田・白石）まで
〒七九〇 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階
（財）愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 〇八九九（三三）七七五〇
FAX 〇八九九（三三）七七六〇

発行・平成五年二月十五日

（財）愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議